
ONE PIECE 錬金術と7つの大罪

白閃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECE 錬金術と7つの大罪

【Nコード】

N1730N

【作者名】

白閃

【あらすじ】

ある日突然田中太郎は神と名乗る幼女にあつた。そしてその自称神にワンピースの世界に行つて原作を破壊しろと言われる。

そんな自分勝手な理由で転生された主人公には鋼の錬金術師に出てくる技を使えるというチートな能力が付与される。

それを活用して自称神に云われたことを少し実施しながら自由に生きていく物語。

これは処女作です。

チート・駄文・ご都合主義・妄想・不定期更新などの成分が入っています。

お気に召さない方は見ないことをお勧めします。

8月31日、主人公設定追加

プロローグ（前書き）

初めて書かせていただきます、白閃です。
私も小説を見ていたら書きたくなりました。
不定期更新ですが、よろしくおねがいします。

プロローグ

ワンピースと云う漫画は好きだ。しかし掲示板に書き込んだりなどはない、普通に好きなだけ。

単行本だって集めた事はなかったし、ジャンプが発売されても立ち読みする程度。それに絶対に最初にワンピースを見ると云う訳では無かった。

俺がワンピースを読み始めた切欠も友達が買っていた単行本を貸してもらったと云うだけ。

—— あ、不純だがかわいい娘ばかりと云う理由をつけ加えても良い。

ただ、それだけだ。原作自体はそんなに詳しくないし、大体の事しかわからない。

それなのに、俺は、俺は——

「ワンピースの世界に行つて原作を根本から叩き潰せ。」

と云うことを自称神に命令された。

うん、ホント舐めてるとしか言えない。うん、馬鹿なんじゃないかと思う。

神だからって何でも許されるわけじゃないと思うんだよね、うん、ホントに。

何なんだろう。しかも神って云う割に威厳ないし、何より幼女だし。いくらロリコンでも俺はそこまでには手を出さないよ。

—— 何か何故に命令？

幼女に命令されるとかホント腹立つ。何事だよ、俺の重ねて来た年月はなんだったんですか？って感じだよ。

「いや。そんな勝手なこと云われても困る。早く返せ糞餓鬼が。」

「……………つつぐ……………」

「いや、意味わかんねえよ！？俺悪くないじゃん！せめて命令じゃなくて頼むくらいはしようよ！」

「お願いします……………」

案外素直に土下座をした少女。なんか俺が悪者みたいで嫌な気分になるわ。

今更だけど俺の名前は田中太郎。顔は普通。黒髪黒眼。頭は良くも悪くもない。所謂影の薄い少年A的な人間だ。

産まれてこの方目立った事など皆無で学園祭の劇などでは裏方か一回しか台詞のない役。小学校の時は全て木か海藻だった気がする。

——あ、木って云うのは陸を基本とする童話の劇で、海藻って言うのは浦島太郎の劇だ。

そんな俺が何故かワンピースの原作を破壊しなければならんのだとか。俺的には転生してもアーロン倒せる力手に入れて、あとはゆっくり平穏を過ごしたいのだが。

「まあ話くらいは聞いても良い。なんで俺なんだ？」

「宇宙一冴えないからです。」

「よし死ぬ。いや、死ぬ前に全世界の少年A……………もとい、田中太郎に謝れ。」

「いえ、名前じゃなくてあなたの存在がゴミだと云うんです。」

「云いたい事をスパスパ云う奴は嫌いじゃないが……………殺してしんぜ

ようか？」

流石に俺の存在がゴミとは云い過ぎだろうよ。冴えない「ゴミ」って絶対におかしいもんね。

「あなたに私は殺せません。だって神なんですから。」

なんか無性に苛々してくるのは俺だけ？無い胸張られてどや顔されてもホントム力つくだけだ。

「まあいいや。それでそのゴミがなんで1つの世界を変えないといけないんだよ。人間的に今までの世界じゃ必要だったとか言ったら殺すぞ？」

「いえ、そうではありませんよ。よくあるじゃないですか。あの…2次創作で。その天麩羅？的なものを作ってみたかたんです。」

この神…死刑決定でいいでしょうか？因みに天麩羅↓テンプレなそれより何だ？神ってのはそんな簡単に原作破壊しても良いのか？しかもその動機が二次創作って…ダメだろ。

「その我が儘で俺はワンプーの世界に行くのか？」

「当然です。因みに前世の死因は事故死。『帰宅中に石を蹴りながら帰っていたらその石を犬にぶつけたら追いかけられた挙句、追われる途中に転けた拍子に頭を強打した』と云う珍しく目立ったものです。」

死ぬ時くらいは目立させてあげても良いかな、と思って。因みにその時の映像は全世界で放映されました。これで有名人ですね！！」

満面の笑みでサムズアップする幼女を俺は無性に殴りたくなつたがやめた。もうあの世界に帰る事はないだろうし、実際目立てて良かったと思う。

死ぬ時も自殺とかだったらもう哀し過ぎる。絶対誰も泣かない自身があるから。なら笑ってもらえる方が幸せだろう。

—— おれ、どれだけ哀しい人生送ってんだよorz

「せめて平穩を送れるくらいの力はくれ。鍛えるのも面倒だし。」

因みに俺は一度も部活をやった事がなく、趣味も算盤だぜ！！なのに暗算は苦手だ。

「じゃあどんなのが欲しいですか？」

「そうは云つてもなあ。俺あまり漫画とか見ないし。」

「じゃあ私が決めましょうか？」

「まあ……使い方がわかるものな。」

まあどうせ俺はアニメとか漫画とか全然知らないし。引きこもりなのにオタクじゃないとかおかしいよなあ。

「じゃあ1つ目。某漫画の錬金術が使用可能。この時真理を見ずとも錬成陣不要で術の発動が可能。

2つ目は某漫画の7つの大罪全てが使える。ウロボロスの刺青は両眼に。

3つ目は綺麗な容姿。モデルは人間時のアルフォンス・エルリック。
4つ目は霸王色の覇気。剣術は鷹の眼くらい。
5つ目は一番重要な桁はずれな知識と想像力。

まあ悪魔の実は食べられない体なので食べないくださいね。原作の壊し方は任せます。

海軍に入るのもよし、海賊になるのもよし、賞金稼ぎになるのもよし。でも普通に暮らすと云うのだけは無し。

転生先は原作15年前のシャボンディ諸島。その時の年齢は15歳。つまり原作開始の時は30です。

名前はアルフォンス・エルリックで。

何か質問は？」

「いや、ねえけど。」

一気にしゃべり過ぎだ。それに結構なチートだ。

普通に錬金術使えれば最強なのに。身体能力も半端ないし。まあ死なないならいいか。

「じゃあ行つてらっしゃい。ご武運を祈っています。」

そう云う事で俺はその空間から真つ逆さまに落とされた。

あの神……次会ったら殺す！

プロローグ（後書き）

感想がいただければ嬉しいです！
これからも頑張るのでお願いします！！

主人公設定（前書き）

感想で7つの大罪がわからないと仰った方がいたので早めに設定を作りました。

少しだけ修正しました

主人公設定

名前：アルフォンス・エルリック

二つ名：金鷹きんよう

二つ名の由来：金髪で、鷹の様な眼の能力から。

通り名：魔眼の創帝

通り名の由来：両眼にあるウロボロスの紋様と錬金術の能力から。

容姿：アルフォンス・エルリックそのまま。

髪：金長髪でポニーテール。長さはポニーテールで腰より少し下まで、何もしていない状態だと膝裏近くまで。

身長：約2 m。わかり易く云えばモリアの3分の1強。

服装：ズボン^{ズボン}は黒のストラックス。上は黒のワイシャツのボタンを真ん中2つだけ止めたもの。そして脰^{うで}の辺りまである長いフード付きの紅い外套を羽織っている。

わかり易く云えばエドワード・エルリックっぽい感じ。

能力

7つの大罪の全てが使える。
ラスト

色欲の最強の矛：指先を伸縮自在の鋭利な刃に変えられること。刃を自在に操り全てを貫く攻撃力

グラトニー

暴食：鋭い嗅覚。何でも食べられると云うのはつけなかった。その代わり疑似心理の扉への収容と排出が可能。要するに王の財宝が複

ゲイト・オブ・パレロン

写可能。女の前で使うのは気が引けるので戦闘時しか使わない。

エンヴィー

嫉妬：変身能力。ただし自分が完全に対象の全てを把握しないと完璧模倣は不可。これも何かと使うのが嫌なので如何しても逃げたい時だけ使う。反動として変身した時間の分だけトカゲになる。

グリッド

強欲の最強の盾：体内の炭素の結合度を変化させて硬度をダイヤモンドの様にできる。しかし全身にするのは嫌なので部分的にしか使わない。

ラース

憤怒の最強の眼：銃の弾道さえも見切る動体視力。これは両眼。

スロウス

怠惰：これは主に身体能力。尋常ではない筋力と残像すら残さない移動速度。これは制御可能。

プライド

傲慢：影を自在に操る事が可能。ただし伸ばせる影の限界は半径500m程だけなので超広範囲探索などには使えない。完全な暗闇や光が弱点。

鋼の錬金術に出てくる錬金術を使用可能だが、主に焰・鋼・紅蓮、それに錬丹術しか使わない。錬丹術は回復系だけ。

独自に開発した光を操る錬金術や風を操る錬金術など、様々なものが使用可能。

理解をすれば大体のものを錬金術として使用出来る。

・覇気：覇王色、武装色、見聞色の全てを扱うことが出来る。

霸王色：自身の錬金術の錬度によって効果範囲が変わってくる。特定の人物にだけ向けることも可能。

ロギア

武装色：3つの覇気の中で最も得意とする覇気。自然系に攻撃を与えるのはもちろん、技の威力をかなり上げることが出来る。7つの大罪の固有能力の底上げも可能。

見聞色：3つの覇気の中で最も苦手とする覇気。相手の行動が先読み出来たり周囲の声を聞くことが出来るが、エネルギーの様に広範囲の

ものは不可能。
限界で半径500m。

主人公設定（後書き）

これからも追加はしていく予定です。

始動（前書き）

出来るだけ早くあげていききたいと思っています。

始動

俺はあの後意識を失って気がついたらベッドの中。

「知らない天井だ……。」

それで目の前には知らない天井。まあ当り前と云えば当り前か。これで知ってる天井だったら恐いからな。

「おお、気がついたか。」

何処からかわからないが声がする。まだ慣れない体を擦って声のした方を見てみる。

そこには銀髪？白髪？の髭が特徴的な老人がいた。老人ではあるが、まだまだ若い感じた。

その人は如何見ても“海賊王の右腕”・“冥王”・“生きる伝説”などと云われるシルバース・レイリーと云う人。

いきなり原作人物に会えた喜びとその人の持つ圧倒的な力が伝わる恐怖で気持ち悪い感覚に包まれる。どちらかと云えば恐怖の方が大きいので吐き気を催した。

だが吐く事はなく、我慢する。初対面の人間の顔を見て吐かれたとあらばレイリーの立場がないだろうと思って。

「ここは何処ですか？」

取り敢えず吐き気を抑えて情報を集める。確かシャボンディ諸島に飛ばすと云っていたが、この島はあまりにも大き過ぎる。まあ大体の予想はつくがな。

「ここは私の知り合いがやつとる店だよ。店の名前は……聞かん方がいいだろう。」

レイリーのシャボンディ諸島の知り合いで店を構えている人間なんて俺は1人しか知らない。なので店の名前を伏せられても特に意味はない。

「何で俺をここに運んだんですか？ 見ず知らずの俺を。」

今は店の名前などどうでもよい。

問題は何故レイリーが見ず知らずの俺をここまで運んできたかとうこと。

この人ならそんな危険は冒さない筈だ。戦えば強いが、戦う事はあまりないし。何より目立つのが嫌そうだし。

「何で、か。店の目の前に倒れとったからではダメかな？」

まあレイリーの気持ちも何となくわかる気がする。そりゃ店の前に人が倒れていたら、しかも未だ15歳の少年が倒れていたら助けるだろう。

それに自称神も俺の顔は中性的って言うてたから女に見えた可能性もある。もしそうならそのまま人攫いに連れて行かれる可能性もあるからな。

まあ兎も角助かったのだから、礼は云わねばならないだろう。

「助けていただいてありがとうございます。それでは俺は失礼させていただきます。」

体の調子も悪くない様だし、出来ればどの程度の力を発揮できるか確かめたい。

何より長くいて迷惑を掛けるのは気が引ける。人類の地味代表として。……今は違うか。

「もう行くのかい？名前くらい教えてくれてもいいだろう。」

「そうですね。俺も助けてくれた人の名前は知っておきたいですし。」

まあ知っているんだけどね。これで知っていたら少し不自然だろう。有名だからと云う理由では何かおかしい気がするし。レイリーはそんなこと気にする魂^{たま}ではないだろうが、一応。

「私の名前はレイリー。シルバース・レイリーだ。人前ではレイさんとも呼んでくれ。」

「俺の名前はアル。アルフォンス・エルリック……あれ？エルリック・アルフォンスか？いずれにしてもアルと呼んでください。」

俺とレイリーは互いに手を取り合って、確りと握りあう。

「アルくんはなかなか力が強いようだね……。」

「え？あ、すみません!!」

しかし力の入れ具合が分からずに、結構強く握っていた様だ。自分では全然そんな感じはなかったので意外だ。と云うより軽く被せた程度だった。

前世の俺の握力は50程度。それでは本気で握っても全然とは言えないが痛がるほどではない。

この世界に来て俺の力は本当に強大になったようだ。その事が少し

怖かったりもする。

まあ死なない程度には調度いいのではないかと思う。

「いや、大丈夫だよ。それにしてもその体の何処からそんな力が出るのか……。」

レイリーにそう云われて俺の体を見るとガリガリではないが、とても力がある様な体では無かった。

これの何処にあの怠惰スロウの力が入っているのだろうか。不思議体質だな。

「俺にもよくわかりません。昔から外見みためは変わらないのに力だけがつくみたいで。」

まあ適当にはぐらかしていれば大丈夫だろう。鍛えた憶えはないがな。ただ産まれて来たただけだ。

そしてその時に自分の服装を確認したのだが、ズボンは黒のスラックス。上は黒のワイシャツのボタンを真ん中2つだけ止めたもの。

そして恐らく自分の荷物である白い体操袋の様なものと、椅子に掛けてある赤い外套。

靴は赤茶色のハイカットのもの。

わかり易く云えばエドワード・エルリックっぽい感じ。

「そうか。そう云えばこれから行く宛てはあるのかい？」

行く宛ては無い。

しかし山の中にでも籠ちからって自分の能力を確かめなければならぬ。原作を変えないといけないので能力は制御できる様ちからにしておきたい。

「無いですけど、浮浪者ですからね。修行もしなければなりません

から。」

「行く宛てがないなら、ここに住んではどうかな？私の家じゃないから私が許可するのもおかしい話だが、悪い話ではないだろう。

それに君の様な女の子が1人で旅と云うのも危ない。さっきの様に倒れていては人攫いに連れて行かれる可能性もある。

それに修行ならこの辺りですれば大丈夫だろう。自然と強い海賊が集まってくる場所でもあるからな。」

まあレイリーの云う事は正しいのだが、一部だけ誤りがある。

俺が何故か女と認知されている事だ。言葉遣いに関しては気の強い娘と云う事で割り切っているのだろう。

取り敢えず訂正と確認をしなければ。

「鏡ありますか？」

「……？あるにはあるが……どうするのだ？」

「いえ、少し……。」

頭に疑問符を浮かべるレイリーから手鏡を受け取って自分の顔を見してみる。

そこには紛れもなくアルフォンス・エルリックがいる。しかし何処か本物より女つ気がする。

唇だって妙に桃色掛かっているし、頬だって薄っすらと桃色、長い黄色に近い金髪をポニーテールにしているし。如何見ても女だ。まあ

両眼にウロボロスの刺青がある事が恐いが、それ以外は女。

それが不安になって自分のものを触ってみる。

—— あった。よかった。

「あ、俺男です。」

「そうだったか！すまなかったな、間違えて。」

「いえ、気にしてませんから。」

この容姿だと目立ちたくななくても目立つよな。地味だった俺では考えられない様な状況に陥ることもあるだろう。

間違えられる事は気にしなくても目立つ事は気にするからな。当分の間はここに住まわせてもらおう。ここは恐らく1〜30番台の地域だろうから一般人はほとんどいないし。

「ここに住まわせていただけますか？」

「大歓迎だよ。」

レイリーは満面の笑みで了承してくれた。持ち主ではないのそんなこととして良いのだろうか。

まああの人なら大丈夫か。

そう云う事で俺の転生譚が始まった。

始動（後書き）

感想・批評・誤字報告・評価等々なんでもまっていますのでドシドシ来たれ！！

能力（前書き）

今回は修行編みたいなものですかねえ。

能力

結局あそこはシャクヤクの経営するシャツキー、SぼったくりBARだった。シャクヤクにも許可を貰って、居候する事が許された。それで今は何処かの森に來ている。何処でもよかったのだが、矢張り最初は誰も見てない森でやるのが一番だと思ったからだ。

そしてその森で、今俺は先ず身体能力を確かめる事にした。怠惰スロウスの身体能力はどれほどのものかわからない。

恐らく半端ない程のスピードとパワーがあるだろう。それに他の7つの大罪もあるからな。

なので試しに100mを走ってみた。

結果は100m1秒弱と云う反則。それでも運動がてらなので7割程の力だ。これで六式を使えば本当に反則だと思う。多分傍から見ると消えると云う感覚。

そう云う事で次は岩でも殴ってみる事に。勿論硬化はせずに。

ズボツ！！

確かにそんな効果音だ。

岩が砕けるかと思つて殴つてみたのだが、まさか穴が開くとは思ひもしなかった。しかも手が痛くない。何から何までチートだ。

取り敢えず岩から手を引っこ抜いて、次の修行に入る。

身体能力に関しては十分わかった。六式は如何しよう。鉄塊てっかいと指銃しがん
グライドは強欲でカバーできる。

そる剃もなんとかできそうだから他の紙絵かみえや嵐脚らんきやくや月歩げつぽうだな。

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

全て難なく行えたので次の修行、錬金術だ。短い？そんな事知らない。だって出来たんだからしょうがない。

確か等価交換の原理だから質量保存の法則……つまり無から有は生み出せないんだよな。まあ例外はあつて、増幅が出来たりはするけど。

周りで錬金術の素材に出来そうなのは木、葉、枯れ葉、土、それに空気か。じゃあ先ずは多くの鉄分とか炭素とか含んでそうな土からだな。

パンツ！バシイッ！！

少しそれっぽく手を叩いて土の上に手を置いてみるが、何も出なかった。少し紫電が弾けるものの、何の変化もない。

何故だろうか。そもそも俺は何をしようとしたんだ？

錬金術の基本は『理解』↓『分解』↓『再構築』だよな。

だから先ず土の中にどんな原子が存在するか『理解』して、欲しい原子だけをそこから『分解』する。それを頭の中でイメージして現実に『再構築』する。

要するに知識と脳内具現化、それに立体把握能力が必要なわけだ。以前の俺なら絶対に錬金術など使えなかったが、今の俺には神から貰った知識と想像力があるからそれも可能な筈だ。

「一般的な腐葉土の中に存在する原子は鉄分に炭素とかいろいろお！！」

自分の知識を口にする事でより『理解』を深める。

「次はそこから炭素だけを取り出す！」

そして自分が欲しいものを口に出してほしいものだけ『分解』する。

「最後オ！作るものはダイヤモンドの剣！」

作りだすものを口にして、脳内でのイメージをより強めた後『再構築』する。

「でてこオオオオい！！！」

地面につけた手を少し地面から離して、何もないものを掴む。徐々に手の中に形成されていき、それを一気に引き抜く。

そこで出て来たのは刀ではあった。そして炭素だけで来ている。しかしその刀はただの炭で出来た刀。

ダイヤモンドで出来た刀とは程遠い耐久力しかない。

やっぱり最初からダイヤモンドは無理か。炭で出来た刀を形成できただけでもすごい方だな。

——はあ。ダイヤモンド作ってうはうはな生活とか送りたいかったのに。

そうすれば態々居候させてもらうことなく家を建てて1人暮らし出来るのに。

まあいつまでも凹んでいても仕方ないよな。次は何を試そうか。原作破壊するなら攻撃的な錬金術だよな。

俺が知っている攻撃的錬金術……あの2つか。

鋼は応用力高いけど地形によるからな。地形に左右されないあの2つ、焰と紅蓮を習得するべきだろう。

でも生活資金溜めるなら鋼だし。傷を治療したりするなら鍊丹術だよな。どうすりゃいいんだよ。

でもまず身を守る力は必須だよな。だからやっぱ焰と紅蓮か。

因みに焰は発火能力で紅蓮は爆破能力だ。

「よし！まずは焰の鍊金術から行こう！マスタングっぽく！」

荷物の中には発火布が入っていたのでそれで如何にか出来るだろう。そう思つて荷物が入れてある小さな袋を漁る。

「グオオオオオツ！！！」

荷物を漁つて発火布で出来た手袋を手に装着したところで、後ろから獣の鳴き声が聞こえる。……気のせいであれ、気のせいであれ！！

——— いましたよ。如何にも人間でも喰いそうなハイエナが。舌出してハアハア云つてるよ。

不味いなあ。これは所謂死亡フラグですか？それともこれで死線を乗り越えて強くなるとか能力に目覚めるとか云うあれですか？

出来れば後者が良いな。

そんな事を考えているとハイエナ一匹が飛び掛かって来た。

珍しいな。ハイエナは餌を喰う時は単体で動くが狩りをする時は集団の筈だ。それで強い奴だけが食べる。

それに大体が死体を喰っている筈だが……この世界は違ふのか？そんな事を考えられる余裕がある程、ハイエナの動きがゆっくりに

「死ねエンヴィイイイツ！！！」

ゴオウウツ！！

それっぽい事をいうと空気中で大規模な火炎が発動した。

まあそれが何も無い空気中だったらよかったんだけどね。予想外に座標がずれて遠くにあった海軍船があったところで炎が出て来たんだよね。しかも大型帆船。

俺はこの目で見えるけど相手は見えないだろうね、うん。だからどうしたか？

そりゃあ……………

「俺の所為じゃねえ！」

直ぐに逃げましたとも。

能力（後書き）

次から原作に介入したいと思います。
感想等々受け付けていますので是非！！

逝かれた脳（前書き）

今回はマリージョア襲撃編です。
原作はさほど変わらないかな？

逝かれた脳

修行をし始めて早2年。何故こんなに飛んだか？そんなこと聞くんじゃねえよ。野暮つてもんだぜ。

因みに最近では完璧に力を制御できるようになって、錬金術・錬丹術全般を使える様になった。

今ではいちいち口に出さずとも自然と脳が理解して、想像力もかなり豊かになった。それもこれも修行の賜物。

焰や紅蓮の錬金術の座標がずれる事なんてまずなくなつたし、火力もかなり上がった。勿論それについての制御も完璧。

それと変わった事が1つ。ダイヤモンドとか金とか勝手に創って自分の家を構えた。勿論シャクヤクの店の近く。

ホントは非法だからいけないと思つたよ？でもそう云うのこの世界では関係なさそうだし、景気も良さそうだったからつい。

それに貧民に恵んであげるつもりでね？……ってこの見解最悪じゃねえかorz

色々あつたけど取り敢えず原作13年前ね。この2年間は色気とか原作とか一切関係なかったから飛ばした。

それで今年は何かあつた気がするから止めた。その何かは俺の知識からでも漁ってみよう。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

はい、あった。今年はかの有名なフィッシャー・タイガーのマリー
ジョアの襲撃。まあこれは表向きで実際は奴隷解放ね。

恐いね、ホント。如何やったらあんなところに1人で乗り込もうと
考えれるんだろうね。人間の思考を凌駕してるよね。……あ、魚
人が、あの人。

魚人でも思考能力は人間と同じだった気がするけど、多分脳が逝か
れちまったんだと思う。

とか何とか人の事云ってるけどね、俺の脳も逝かれちゃってるわけ。
だって何故か知らないけど見たことない魚人と一緒に船に乗ってる
んだから。

そりやもう逝かれちゃったわけ。

「なんで魚人さんがここに居るんですか？」

俺には一切の記憶がないぞ。あるとすれば鉄で超大型帆船を創って
成功したのでそこで寝ていた所までだ。

実は錨を創り忘れて船ごと流れたってわけではないと思う。

「流れて来た船に1人しか乗って無い様だったから乗ったまでだ。
調度大型船が欲しかったところだ。」

よし、落ちつけ。あの人は脳が逝ってるんだ。

だから人が『1人しかいなかった』らそれは『いない』と云う事に
なるんだ。だから見つけた自分のものと云う訳だ。

そして自分の欲望は満たす人なんだ。誰のものでも関係なく欲しい
ものであれば自分のものなんだ。どこぞの餓鬼大将の様に。

「これから何処に行かれるおつもりで？」

まあこの際船はあげよう。かなりの力を使って創った代物だが、錨

がないと云う失敗作だ。この人もどうせ使い捨てにするだろうから海軍の研究対象にでもなればいい。

「それよりもこの船は帆以外全て鉄でできているのか？」

俺的には船の素材なんかより行き先の方が重要なんだけどね。答えないと俺の質問に答えてくれそうにないしね。

「はい、まあ。」

「じゃあ何故浮いているんだ？」

「それはまあ海面と船底の接地面積が広いからってのが一番大きいですかね。それ相応の浮力が生まれますから。それに俺自身が動かしていますから。」

因みに流石にただで浮くわけではないので俺がエンジン室に行つて偶に大火力で浮力を生み出す為に発火させている。

「じゃあお前がいなくなればこの船は沈むのか？」

「いえ、そう云う訳ではないです。何もしなくても1週間程度は何とか浮き続けると思います。」

流石に直ぐに沈まれては困る。沈ませない為に船底を異常に広くしたのに、沈んだら俺の努力が台無しだ。

「まあ用心に越した事はないな。だから今から行くところについて来い。」

出ました、命令。指図されるのは結構嫌いなんですよね。

それにこれから行くところなんて大体決まってるよね。絶対に行きたくないよね。

自分から死に行くなんて無理だし。殺気と覇気をあてられるのはレイリーのお陰で慣れたけど、やっぱり怖い。

「何処行くんですか？」

最終確認だ。これで『マリージョア』なんて云った日には俺は泳いででもシャボンディ諸島に帰るぞ。

「マリージョア。」

ザパアアンツ！！バシャバシャバシャ……！！

「ここから一番近いシャボンディ諸島でもかなりの距離があるぞ。人間なら先ず着く事は不可能。途中で海王類に喰われて死ぬぞ。」

パシッ！バシイインツ！！ジョバジョバジョバ……！！

「ふう、それを先に云って下さいよ。」

「……馬鹿だな。」

よし、これまでの流れを説明しよう。

先ず魚人が妙な発言をしたので俺が海に飛び込んでかなりの速さで泳いだ。しかし魚人が何やら慌けた事を言うので確認の為に錬金術で水流を操って船に帰って来たと云う訳だ。

そして何故か錬金術に関しての突っ込みがない。

「さっきの事は本当ですか？」

「ああ。遅れたが俺はフィッシャー・タイガーだ。」

「あ、これはどうも。俺はアルフォンス・エルリックです。アルツ
て呼んでください。」

何自己紹介してんだ！社交なんて俺にはいらねえ！
平穩！俺に最も必要なものは平穩なんだ馬鹿野郎！！

「女なのに珍しい名前だな。」

「俺は男です。」

「……………」

なんなんだ？真実を告げただけなのに何故沈黙が訪れるんだよ。
せめて反応してくれよ。リアクション 沈黙が一番心に突き刺さるから。

・

・

・

・

・

・

沈黙が船上を支配してから数分が経って、とうとう赤い土の大陸に
着いた。俺は結局手伝う事になった。

そんなこんなで逝ってみましょうか！天国に！

—— もとい、行ってみましょうか！聖地マリージョア！

俺は赤い土の大陸をフィッシャー・タイガーと一緒によじ登った。
レッドライン

他に道があつた筈なのに、何故かよじ登って。

まあ一直線に行くと云う意味では一番早いルートではあるが、着く前に疲れてしまつたろうに。

俺は疲れたぞ。いくら身体能力が高くとも疲れるものは疲れる。でも身体的な疲れじゃなくて精神的な疲れ。

「じゃあ作戦通りにやる様に。」

「はい。」

頂上、聖地マリージョアのすぐ近くに着いた俺とフィッシャー・タイガーは左右に分かれてそれぞれ違つところから侵入する事になった。

聖地マリージョアとは誰が云つたのだろうか。こんなところ聖地でも何でもない。ただの天竜人の玩具箱じゃねえか。

宮殿の外には傷だらけになりながら労働を強いられる奴隷。見張りの海兵たちも少し気の毒そうな顔をしている。

しかしそんな事には慣れているのだらう。口出しもしなければ、吐き気一つ催さない。

そんな奴隷たちは未だました。外で陽の光を浴びられるのだから。光の屈折率を変えて誰にも視認が出来ない様にして宮殿内に入つてみると、そこはまさに生き地獄。

天竜人と思しき奴が何番目の妃かは知らないが、無理矢理廊下で犯したり、奴隷と要らなくなった妃を壇上でやらせたりしていた。中でも酷かつたのが働けなくなつた奴隷の処分法。

それは的にして銃で撃ち抜くと云うこと。そして体に色を塗って得点をつけていたりする。的にされている人は泣きながら当たらない様に逃げている。

そして結局撃ち殺される。そしてその死体をまるでゴミを見るかのような目で見る。

「てめえらは何様のつもりだあああ！！！！」

焰の錬金術を発動させる為に屈折率を元に戻して、発火布の手袋を装着して指パッチンする。

相手に喋る余地すら与えず、死体が誰か判別が出来ない程の火力で焼き尽くす。それは刹那に起こったこと。

未だ奴隷が居る場所が特定できていないのに、感情に任せて天竜人数人を殺してしまった。だが後悔はしていない。

作戦は変更。襲撃の意思を示して天竜人を先に逃げさせ、奴隷の解放をする。どうせフィッシャー・タイガーも見つかっているだろうから。

恐らく俺の発火の時に出る爆音が聞こえたのだろう。辺りが騒がしい。

「貴様！侵入者か！」

「それが如何した？」

「侵入者一命捕捉！至急援護に来てくれ！場所は第五宮殿！」

「かかれえ！！」

護衛部隊の内の1人が全域に放送される電伝虫で俺の事を伝える。

これで恐らく奴隷は逃げる事が出来る。
そして終わりが見えない程の兵たちが雄叫びをあげながら俺に突っ込んでくる。

「甘いんだよ。」

パンッ！バシィィッ！！ズゴゴゴゴ………！！

俺は手を合わせて、地面に手を着く。床がコンクリートで出来ている場所だったのでコンクリートの壁を創って俺に触れる事を防いだ。恐らくこれを壊してくるだろうから俺は近くの壁に扉を創って外に出た。そして外に出た後はちゃんと扉を消した。
外では既に奴隷が逃げ始めていた。恐らくその内大将格の海兵たちも来るだろう。その前にゴルゴン三姉妹だけでも見つけとくか。

「キャアアッ！」

「姉様！！！」

何と云う主人公補正。探す手間が省けたと云うものだ。

目の前には宮殿から出て来て転んだハンコック。そして姉を思うサnderソニアとマリーゴールドの妹2人。

なんて云うか……… 3人とも美人だね。ハンコックだけじゃなく妹2人も美人だよ。

でも3人とも服はボロボロで、逃げたいと云う必死な思いが伝わってくる。恐らくこの3人は美人だから普通の奴隷では無く性奴隷の様な扱いを受けて来たのだろう。

「大丈夫ですか、お嬢さん。」

転んだハンコックの前に瞬時に回り込んで、しゃがんで手を差し伸べる。少し気障っぽく、気取ってしまった自分が恥ずかしい！

「あ、はい。妾は大丈夫じゃ。それより早く逃げねば。」

「それなら俺が連れて行きましょうか？」

逃げようと云っても何処に逃げるかわからない筈だ。それに逃げるなら俺も早く逃げて海兵との戦闘は避けたい。

下手に有名になると俺の平穩が——ってもう天竜人数人焼き殺したしな。平穩なんてないよな。

でも俺は絶対にいい事をしたと思ってる！世間的にね。海兵の立場とか……知らない。

だつて神様の方が偉いでしょ！命令されてるから仕方ないもん。

「そなたに迷惑が掛かるのではないか？」

「大丈夫ですよ。俺は男ですから。」

「『ええッ！？』」

何だろう。もの凄く哀しくて、目から水が落ちてきます、お母様。なんか俺が男と云う事を完全否定する様な反応はきついな。リアクションしてくれない人の方がきついけど。

「そんなに驚く事じゃないでしょう。如何見ても男じゃないですか！」

俺の発言に3人はアイコンタクトを取る。俺は何かしたのか？

「喋り方が女の人みたいじゃ。」

代表してハンコックが俺が女に見える理由を云った。まさか丁寧語を使っていただけなのにそんな風に見られてるとは。

俺的には未来の皇帝さんだし初見だから一応丁寧な言葉を使っているだけなのに。

「まあそれは置いておいて早く逃げるぞ。ここにいたくないんだろ？」

「「「うん！」「」」

俺は3人を連れて乗って来た船のある方へと走って行った。3人がいても月歩で降りれるだろう。

「そう云えば名前は？」

俺たちは走りながら自己紹介する事になった。俺は全員の名前を知っているが、向こうは知らないから。

それで俺も聞かなければならないのだ。知っているのに。

「妾はボア・ハンコックじゃ。」

黒髪ボインの俺と同年代の少女が最初に名前を告げる。

「私は次女のボア・サンダーソニアよ。」

緑色の髪をしたボインの俺より少し下の少女がハンコックの次に告げる。

「私の名前はボア・マリーゴールド。三女。」

オレンジ色の髪をしたボイン……ではないが発達途中な少女の自己紹介も終わる。

「俺はアルフォンス・エルリック。しがない暇人だ。そう言えばハンコックは何でそんなに婆臭い喋り方なんだ？」

「な！？婆臭いとは何じゃ！品があると云わんか！無礼者！」

「ちよっ！そんなに顔近付けるなよ……！！」

少しからかってみようとした発言だったのだが、予想外にハンコックを怒らせてしまつて、俺に顔を近付ける。

ホントに近い。俺が少し屈んで近付けば、キス出来る距離。

それが恥ずかしくて、そっぽを向いてしまふ。本当はもっと見たかったのだが、その顔はあまりに綺麗過ぎて直視できなかった。

前世では地味だったので美少女が俺に顔を寄せると云う事が無かった。まあ中の中な顔なので彼女が出来た事くらいはあるが、彼女は美少女じゃなかったし。

「あ、ごめんなさい……。」

ハンコックはそんな俺を見て元氣なく項垂れる。その瞬間希望と殺気を織り交ぜにした君の悪い視線を感じたのは気のせいにしておう。

「報告にあつたのは君の事かなあ？金髪の子で、赤いフード付きの外套を羽織っていると云うのは。」

「それは残念でした。俺は男なんで失礼します。」

黄色とオレンジのストライプのスーツを着て、黒いサングラスをつけている顔が皺だらけの中年男性がいきなり俺の前に立ち塞がるが、俺は男だと主張してそれを躲す。

「あつれ〜？おつかしいなあ〜？確かに君だと思ったんだけどねえ〜。男じゃあ仕方ないよねえ〜。」

案外簡単に撒けた。黄猿と云つてもちよるいもんだ。俺たちはそのまま船を目指して駆け抜けた。

「今新しい情報が入ってねえ〜。如何やら男の娘らしいよお〜。だから君で合ってるねえ〜。」

……はあ〜。不幸だ。

何かと言い逃れは出来ないものか。……出来ないな。なんだかんだで勘はいいみたいだし。

だったら戦うか。周りは奴隷だった人たちが反乱を起こして戦ってるし。

「マリーゴールド、サンダーソニア！お前らはハンコックを守ってる！俺がこいつをやる……！！」

「ほんとにかあ〜い？わっしは一応大将なんだけどねえ〜。」

「御託はいいから始めようぜ……？」

そうして俺と黄猿の一騎打ちが開始した。

side out

海軍本部大将“閃光の黄猿”ことボルサリーノ。通称黄猿。それに対するは二つ名など付くような行為は全くした事がない——いや、過去に何度か海軍船を沈めた事があるが——男、アルフォンス・エルリック。

アルフォンス改めアルは、黄猿と戦わなければならない運命を呪った。何故なら勝ち目など微塵もないから。

いくら普通の人間では有り得ない速度で動こうが、いくらスロー映像の様に見える眼があろうが、黄猿に関しては何の意味も持たない。なぜなら彼は自然系悪魔の実・ピカピカの実を食べた光人間だから。どれだけ速く動いても光には追いつけず、光を捉えることなど不可能。そして傲慢の影も使用不可。

それでも男として戦わなければならない時がある。それが、今だ。女の前で敵に背を見せることなど、アルには不可能だ。仲間の夢を笑われて立ち向かう男もいれば、誇りの為に立ち向かう男もいる。

「おらあああ！！」

アルは手始めに覇気を込めていない、そして温度の低い炎で黄猿を焼く。しかしその効果は無し。

「なかなか面白い事をするねえ。能力者かい？」

「答える義理はないな。」

「釣れないねえ。じゃあわっしからも仕掛けようかねえ。」

黄猿はアルの方に右人差し指を向ける。その瞬間アルは次に何が起

こるか理解する。

なので少しだけ動いてパシンと手を合わせて、何も無い空气中に押し付ける。その瞬間に黄猿の指からは光線が放たれ、アルの体を突き抜ける。

「呆気無かったねえ。もう少し楽しみたかったんだけど、仕方ないよ。」

光線が当たったアルの体には穴が開いているのにも関わらず、血は流れていない。そしてそのあるの体は歪み、そこには何もなかったかのように消え去る。

「少し甘いんじゃないか？」

「興味深いねえ。嫌いじゃないよ。」

その状況に黄猿は少し口角を持ち上げる。それを見てアルも口角を持ち上げる。

アルはあの一瞬の間に光を操って自分の偽物を創りだし、尚且つ自分の姿が見えない様に光の屈折率を変えた。

それだけの事をやったのだから、多少の疲れが見える。

「それでも……喰らいな!!」

グツと右の親指と中指に力を入れて、指を鳴らす。そして大火力で黄猿を燃やす。この時の炎の温度は約2千度。これが今のアルの限界値だ。

「こつちだよ。」

しかしそれは避けられ、後ろに回り込まれる。そして蹴りの体勢に入った黄猿を見て直ぐに地面からダイヤモンドの剣を錬成する。そして蹴られる前に覇気を込めたダイヤの剣を横薙ぎに振るって黄猿を斬る。

「ッ！！！？覇気が使えるのかあい？」

「ああ。油断したな。子供だからって舐めない方がいい。」

黄猿の腹から血が滲み、その痛みから膝を着く黄猿に対し追い打ちを掛ける様にアルは覇気を込めたダイヤの剣で斬り裂こうとする。

「大人を舐めない方がいいよオ。わっしもそろそろ本気を出そうかねえ。」

しかし黄猿は間一髪のところまで避けて、一息吐いて、眼の色を変える。今までは真剣では無かったと云うことだ。

「やれるものならやってみろ。」

「そうだねえ。」『天叢雲剣』あまのむらくもでやろうかねえ。」

黄猿はそう云って光の長剣を作り出す。それを見てアルも剣を少し長めに作り直す。

2人は一瞬だけ睨み合い、ぶつかり合う。

「ダイヤなんだから大切に使ったらどうだい？」

「いいんだよ。こんなものはいくらでも作れる。」

アルの云う通り、炭素があればダイヤモンドなど簡単に造る事が出来る。……非合法ではあるが。

そんな2人の戦況はと云うとアルが有利。流石に世界最強の剣士と同等の腕前と云ったところだ。それに加え最強の眼。今の黄猿が光の様に早く動くわけではないので完全に捉えている。アルは攻め続けて、徐々に黄猿を押ししていく。

「これで如何だ!!」

光の剣をアルが弾いて黄猿に大きな隙が出来たところで、アルは小さなモーシヨンで斬り掛かる。

アルの場合は態々大きなモーシヨンのせずとも大きな力が生み出せるのだから当然だが。

「まだまだ負けるわけにはいかないねえ。大将が負けたとあつちやあ顔が立たないんだよねえ。」

黄猿にも黄猿の背負っているものがある。それは数こそ違えど同じものだ。

今アルが背負っているものはゴルゴン三姉妹。黄猿が背負っているものは海軍本部の威光。多くの人の平和だ。

なので黄猿はアルの攻撃を再度躲して立ち向かう。

「そろそろ終わらせようかねえ。」

「ああ。俺も飽きていたところだ。」

黄猿は両手を前に出してアルに向ける。一步のアルは両手を天に掲げている。

その状態が暫く続いて、2人は同時に眼を見開く。

「やさかにのまがたま
八尺瓊勾玉！！」

「喰らええ！！」

黄猿の指先からは無数の光弾がアルに向かって放たれる。アルは黄猿が光弾を放つと同時に掲げた手の中で出来ていた大きな球体のプラズマを投げる。

プラズマとは第4の状態。つまり気体が更に気化したと考えればよい。

プラズマは電気や重力を扱えば形成可能だが、風を使っても形成は可能。アルは錬金術で風の向きを変えてプラズマを作っていたのだ。プラズマは電気を帯びているので普通の人間が当たれば即死。しかも覇気を込めてあるので、威力は強大だ。

プラズマを投げた後のアルは直ぐに体をダイヤモンド並みに硬化して光弾を防ぐ。

「ぐ、ぐあああ！！」

黄猿はプラズマに呑みこまれて気絶した。この勝負……アルの勝ちだ。

「sideアルフォンス」

「はあゝ。勝てた。」

今回は黄猿が俺を甘く見ていた内に傷をつけたから勝利で来たけど、最初から本気を出されていれば先ず勝てなかった。

それより技の名前でも考えておこう。エースのパクリとかでもいい

かな。

まあそんなことは後だ。今は逃げなければ。

黄猿がやられた事に対して周囲が驚いている今でなければ確実に逃げる事は不可能。

そう思っ
て俺はハンコックたちがいる方を見る。しかし何故か呆けている。俺は何かしたか？

——ああ、恐らく黄猿を倒したことを驚いて声も出ないと云ったところだろう。そのくらいは誰でも出来ると思うが。

「惚けてねえで行くぞ？ここにいたらまた捕まっちまうぞ。」

惚けている3人の頭を軽く叩いて正気を取り戻させる。

「え？うん。」

3人は未だになにが起こったか理解できていない様だった。

その説明は後ですとして、問題は船だよな。あの船に乗っても良いけど俺的にはシャボンディ諸島に行きたいしな。

でもハンコックたちを女ヶ島に帰してやらねえといけないし。……

まあそれはレイリーが何とかしてくれるか。

先ずは安全だよな。ハンコックたちは自分たちが攫われた場所だから少し良い気はしないだろうが。

だから船は即席で作るか。ここらは鉄が豊富だし。木でも作れない事はないけど全部焼けちまってるしな。

「飛べえええ！！！」

「『ええ！？』」

「俺を信じるオオ！！」

赤い土の大陸の海に繋がるところから俺とゴルゴン三姉妹は飛んだ。
云つておくが下など一切見えはしない。

俺が空気の抵抗を少ない様な体勢で落ちるのに対して、ゴルゴン三姉妹は空気抵抗が大きい体勢で落ちている。

俺が先に降りないといいつ等能力者は確実に海に沈むし、六式も使えないので海にあたつた衝撃で死んでしまう

漸つと海が見えて来て、ギリギリのところでは月歩を使つて耐える。

すつげえ足が痛い。錬金術で如何にかすりゃよかった。

まあ痛みは堪えて錬金術で赤い土の大陸から4人が乗れる大きさの鉄船を作り出す。

船の形は完璧に脳内で模写しているので何もしなくても浮かぶ鉄船の完成だ。あれは大き過ぎてダメだったが今回は小さいので絶対的な自信がある。

『キヤアアアアア！！！！』

船を作り終えたところで3人は殆ど同時に降りてくる。それを錬金術で空気を扱つて衝撃がない様に受け止める。そして3人を鉄船に乗せる。

叫び声はあれだな。嫌に耳に響く高音だったな。キーンってなるくらい。

まあ何はともあれ助かつたんだからいいか。フィッシャー・タイガーには無断で来たけど恐らく大丈夫。あの人なら俺の心配など絶対にしていない。

.....

・
・
・
・
・

そう云う事でシャボンディ諸島に着きました。

——え？早過ぎる？そんな野暮な事は云うもんじゃないぜ。こっちにだって色々と事情があるんだ。

そこら辺は主人公補正で如何にかなってるのさ。

「ハンコツクたちはレイさんとシャッキーの事わかるか？」

原作でも知っている様な口振りだったので一応訊ねてみる。これで違ったら何か嫌だな。

「知っておるぞ。そなたも知っておるのか？」

良かった。知ってるみたいで。

「妾も知っておるぞ。今からそこに行こうと思うのじゃが、いいか？」

少し面白そうなのでハンコツクの喋り方を真似して喋る事に。何か自分でも使っていて違和感がなさそうところがシヨックだ。

「むっ！なんじゃ！妾はそんな爺臭い喋り方はしておらぬ！」

「むっ！妾もそなたの様な婆臭い喋り方では無い！」

ニヤニヤしながら云う俺に対してハンコックは怒り心頭と云った様子で睨みながら顔を近づけてくる。

これは何かが起こりそうな予感……？

まあ何も起こらないだろうけど。それに睨まれているとはいえそんなに近くで見られると恥ずかしい。

恐らく今の俺の顔は真っ赤。今回は綺麗過ぎて眼を離すのが惜しい。

「ん？そなたのその眼の模様はなんじゃ？」

顔を近付けたままハンコックがそんな事を訊いて来る。少しは俺の顔に対して反応してくれ。

「これは『ウロボロスの刺青』って云って不老不死や死と再生の印みたいなものかな。」

息がつまりそうだったので無理矢理ハンコックの顔を引き離し、一息吐いて告げる。今にも心臓が飛び出そうだ。

そう云えば俺はフラスコの中の小人なのだろうか。だったら一回で死ぬ事はないだろう。

でも自称神はそんな能力付与してくれてないしな。でもウロボロスの刺青があると云う事はついている可能性があるよな。

人体の細胞を活性化させる錬金術で超速再生くらいなら如何にか出来そうだけど試しに死んでみたら生き返れなかったってこともあり得るしな。

それに死ぬ痛みってのも嫌だしホムンクルスの能力はないと云う事にしておこう。

「じゃあそなたは不老不死なのか！？」

「いや、象徴って云うだけでそんな能力はない。でも相手の動きが

スローに見える能力はある。」

ガツツリと喰いついてきたハンコックはまた顔を近付けようとしてくるのだが、さっきからずっとハンコックの頭に置いておいた手で阻止する。

その様子を後ろで見ている2人から何か気味の悪い視線が送られてきているのは気の所為だと信じたい。

「妾もそれが欲しい！」

こいつは馬鹿か？俺の眼を寄越せと云う意味か？それとも眼球に刺青を入れたいと云う意味か？

いずれにせよ馬鹿だ。眼球に刺青を入れられるほどこの世界の医療は優れてないだろうし、そんな事をすれば失明する。

俺の眼球と交換するのでも相当な技術が必要だ。つか痛そうだから絶対に嫌だ。

「無理だろ。これは生まれつきのものだから。」

まあ所謂写輪眼の洞察眼だけを異常発達させたものみたいなものだからな。あと鷹の眼みたいなものか。

この眼があれば銃弾の軌道も見えるとか云うし。

「そうか……。それなら仕方ない。」

ハンコックはシュンとした様子でトボトボと歩く。何か俺が悪い事をした様な。

「（ちょっとアル！姉様になんてこと云うのよ！）」

「（そうよ！姉様が悲しんでるじゃない！）」

そんなハンコックの様子を見た妹2人が俺にグツと顔を寄せてくる。そして小声で怒鳴ると云う高等技術。ゴルゴン三姉妹は顔を寄せるのが好きなのか？

俺としても美人にそんなことされるのは嫌ではないが恥ずかしい。と云うより今回は俺は全くと云っていい程悪くないぞ。

「（いやいや、落ちつけ。例えば俺がハンコックに『お前の体をくれ』って云ったらあいつはくれるのか？）」

まあそう云うことだ。それぞれが固有として持っているものをくれなど云う方がおかしい。

「（今の姉様ならアルにだけはあげると思うわ。）」

何でこの2人はこんなに顔を紅くしているのだろうか。俺は何か云ったか？

まあ……体なんていらないけどな。もらって如何するんだよ。

「2人ともやめぬか！アルが困ってるでおろう！」

話題の中心であるハンコックが助け船を出してくれたことで2人はおずおずと引き下がり、漸く俺の近くから離れてくれた。

あのままだったら俺は確実に死んでいたぜ！

しかしサンダーソニアが離れ際に云った『姉様の体が欲しいって云ってみて』と云う言葉が気になるな。

試しに云ってみるか！

「ハンコック、俺はお前の体が欲しい。」

その瞬間にゴルゴン三姉妹全員の顔が噴火した様に紅くなる。

—— やつちまつたああああ！！！！

これってまるでなにかしらやってみたって云う意思の表れみたいなものじゃねえか！

何やってんだ俺！そして何を云わせたんだサンダーソニア！

っ！か会って未だ1日も経ってないのにこんな事云うって……最低だ。もう俺は立ち直れない。

「ななな何を云っておるのじゃ！そそそそんなこと急に云われても困る！妾にも準備と云うものが要じゃ！それに妾はもう……」

まあこの際だからハンコックの異常な動揺ぶりは置いておこう。

それよりもこのシリアスな空気。この根源は確実に俺。いや、元を辿ればサンダーソニアだ。

まあ誰が悪いかなんて事は如何でもよくて、この空気をどうすればいいのだろうか。

この空気になった理由は分かるがどうすれば解決できるのやら。俺が一肌脱ぐべきか？

「ハンコック……。俺は人の過去なんて気にしないよ。だから……まあ、元氣……出せ……よ？」

俺がハンコックに優しく微笑みかけると抱きつかれてしまった。最初は何が起きたか理解できなかったが、俺の胸でハンコックが嗚咽

を漏らしていることで理解した。

俺は抱き寄せようか抱き寄せまいか迷った。だってここで抱き寄せれば俺がハンコックを好きと云う気持ちの表れになる。

でも抱き寄せなかったらハンコックはどんな気持ちになるだろうか。今まで一緒に過ごしてきた妹よりも俺を選んで抱きついてきた。

——もう考えるのは面倒臭い。寂しがってる奴を抱き寄せてやるのに理由なんて要らない。

好きとか嫌いとか関係ないだろ。自分の胸の中で女の子が泣いているのだから、それは抱き寄せるべきなのだ。

ギュッ………！！

左手は頭に添えて、右手は腰に添えて抱き寄せる。

無駄に高い身長のお陰でハンコックを胸の中に納める事が出来た。

嗚咽を漏らしながら俺の服を掴み、グシヨグシヨに濡らすハンコックを俺は見ることなく、ただただ腕に力を入れるだけだった。

逝かれた脳（後書き）

無駄に頑張った結果すごく長くなってしまった……。
これで当面の間は更新できないかなあ……。
でも早いうちに仕上げてupしたいです。

感想・評価とうとう待ってますのでお願いします

”金鷹”のアル（前書き）

うん……。

なんとなく微妙な感じになった気がする……。

それと鋼の錬金術師の26巻が出ましたね。

その時お父様が疑似太陽とか台風とか作ってましたよね。

あれはこの小説でもやっていいのだろうか……。

アンケートとして回答してくださいだされば嬉しいです！

”金鷹”のアル

「マリーゴールド！もう朝よ！」

サンダーソニアがエプロンをつけて朝食を作りながら大声で叫ぶ。

「ううん。もう少しい。」

マリーゴールドは朝が苦手なようで、返事はするものの起きる気配はない。

「起きるのじゃ！」

しかしハンコックの一喝によって飛ぶように起きてリビングに出てくる。

そんな平和な日常を俺は過ごしている。因みのここは俺の家ね。

ハンコックたちは結構傷やら何やらが残っていたのでその治療の為だ。まあ背中 of 『天駆ける竜の蹄』とか云う刺青を見せるのは渋られたけど。

その刻印も俺が後の残らない様に焰の錬金術で消した。マスタングがホークアイの背中を焼いた様にして。

これは結構良いみたいで、背中には後一つ残らず刻印を消す事が出来た。

それで3人の心の傷の内の1つを消した。しかし如何しても消せないものと云うのは他にあった。

まあそれはあまり公言出来る様なものじゃないし、云いたくはないけどハンコックたちの性奴隷としての扱い。

3人の恥部には蚯蚓腫れが出来たり、青痣が出来たりと痛々しいものだった。見る気はなかったが、如何しても俺にだけは知っていて

ほしいと云われたので渋々。

これだけは本当に消せない傷だ。

本当に、消せない。

心の傷も、外的損傷も、消す事が出来ない。

だから俺には何も出来なかった。ハンコックたちの痛みもわからない。

だが3人はその傷がある事を見せただけで満足の様で、その痛みを隠していた。だからだろうか。俺は――

ハンコックと結ばれた。ハンコックだけではなく、他の2人とも。別に同情とかそんなものではない。ただ、俺が出来るのがそのくらいだったから。ちゃんと愛を持ってやった。3人は俺の中では優劣が付けられないから。

と、シリアスな話はここまでにして、俺たちは4人で朝御飯を食べている。ゴルゴン三姉妹の傷が治ったので、今日はレイリーと一緒に女ヶ島に連れていく。

何か不安があるが、そこら辺は如何にかなる筈だ。

「アルはこれからどうするのじゃ？ 妾たちがいなくなって寂しくなるのなら、許可を得て女ヶ島に住まわせてもいいぞ？」

「俺がいなくなって寂しいのはどっちだか……。」

ハンコックの言葉に俺は悪戯に笑いながら返す。

まあハンコックたちがいなくなって寂しいのは俺なんだけどね。ハ

ンコックたちは俺に対して優しく接してくれたから。
それはレイリーやシャクヤクも変わらないけど、矢張り同年代の女の子に優しくしてもらう方が嬉しい。

「妾は寂しゅうなどないぞ……！」

「まあ無理すんなって。今のうちに甘えてないと甘えられなくなるぞ？」

「うゝ……！アルの馬鹿もの……！」

ハンコックは唸りながら俺の肩に寄りそってくる。
最初から素直にそうすればいいのに。

まあ俺もよくこんな美人が肩に寄りそっても動揺しないようになったものだ。毎日一緒に過ごしているから当り前なのかもしれないが、それよりも目の前の2人からの視線がものすごく痛い。何だろうね、この感じ。

「そう云えばお前ら準備は出来てるのか？」

「……あ。」

如何見ても『忘れてました、テヘッ』的な反応だな。今日出発する事がわかったのに何でしてないんだよ。
どれだけ注意力散漫だ？

「馬鹿。飯食べたら用意しろよ？」

俺は呆れ過ぎて溜め息すら出ずに、朝飯のパンを口に運ぶ。
こいつらと一緒に生活し始めて溜め息の吐き過ぎでついに溜め息ま

でもが枯れてしまったか。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

朝飯を食べ終えて3人が準備に取り掛かっている間に俺は1人でシヤクヤクの店に行こうと外に出た。まあ隣だから3人が誘拐される事などまずないから。

その時に異型な生物を見たのは気のせいか？いや、気のせいでは無いな。だとすればあいつは……

「おい、ハチ。お前海賊になるんじゃないのか？」

タコの魚人のハチが居た。額にはまだ何のマークもついてないから、まだ海賊にはなっていないだろう。

「にゅ！？アルか！こんなところで何してるんだ？」

それはこっちの台詞だ。俺が家から出てきたらお前が居たんだから。因みに俺とハチは顔見知り。シヤクヤクの店でお世話になっている時によくハチと遊んだりした仲。

まあ俺を初めて見た時は虐められると思われて逃げられたが。……

俺の顔は断じて恐くない筈だ。

まあそんな事があったが俺が魚人を差別視しない人間とわかって懷かれた。俺は差別視しないんじゃないやなくてただ魚人がどんなものか知りたかっただけ。まあ実際に差別はしてないけど。

「俺は今日から少し旅するんだよ。」

「別にそんな事は聞いてないぞ！なんでこんなところにいるんだ？……いや、それも同じか。逃げなくていいにゆか？」

俺の脳内を少し回転させてみるが、俺が何から逃げればいいのかわからない。

「俺がなんかした？」

「知らないのか！？新聞くらい読め！」

なんだ？何故命令されねばならん。

新聞は最近シャクヤクの店には行くもののそう云う話題が挙がらなかったし、何より政治に興味がない。

それにしても新聞か。何やら悪い予感しかしないのだが。

「まあその話はシャッキーのところでしょうぜ。」

ハチから聞いても信じられそうにないので先ずはシャクヤクの店に入った。何か不穏なものが俺に迫って来ている気がする。

「あら、いらつしゃい。アルちゃんにはっちゃん。2人一緒なんて久しぶりね。」

煙草を吸いながらシャクヤクが出迎えてくれる。客の前くらい煙草はやめろよ。

「こんちわ。少し聞きたい事があるんだけど……俺って新聞に載っ

た事がある？」

他にも要件はあるが、矢張りこれが気になる。平和的な話題で載っていてほしいのだが、俺がやった載る様な事は平和的な事ではない。この心あたり以外のものである事を願おう。

「実際に見てみた方が早いんじゃないかしら。」

シャクヤクは自身の座っている椅子の下辺りを漁って一切れの紙を取りだす。新聞の大きめの切れ端だと信じていた。だが好奇心と云うものがあるので俺はシャクヤクからその茶色っぽい紙を受け取ってハチと一緒に見る。

—— 本名…… アルフォンス・エルリック ——
—— 通り名…… “魔眼の創帝” ——
—— 2つ名…… “きんよう金鷹”のアル ——
—— 懸賞金…… 11億ベリ ——

—— 不幸だ。何が不幸って全世界指名手配書ってところとか初頭でそんな高額がつけられたのとか他諸々。

その後新聞も読んでみたけど俺が海軍の船を何隻か沈めていた事がバレていたみたい。それと天竜人数人殺したことも。ホントに不幸だ。まあ一部じゃ英雄だな。

こんなことなら黄猿なんて倒さなければ良かった。俺は死ぬんだ。その内に。

「おい！戻って来い！！」

俺が現実逃避をしてお花畑を走っているとハチによって現実に引き戻された。もう少しで昇天出来たところを邪魔しやがって。

「ああ！？俺はもう死ぬんだ！政府から追われるなんて俺は堪えられない！」

うわああああ！！！！

そう叫びながら俺はカウンターの突っ伏した。そしてそんな俺に2人は憐みの目を向けるのであった。

「おお！“金鷹”^{きんよう}のアルくんじゃないか！」

コロスコロスコロスコロス……………。

レイリーが嘆く俺に楽しそうに告げてくる。どんな性格してんだあんたは。

「ああゝ！！！！最悪だゝ！！！！」

本当に最悪だ。こんなこと産まれてこの方一度も経験してないからな。まあ経験してたら異常だな。

初頭から余裕で億越えて更に10億ぶつちぎっちゃう人なんか絶対にいないよ。俺が世界初という自信がある。

まあ天竜人殺せばそうなるわな。未だ俺の居場所は特定されてないみたいだけど写真まで撮られてるし。いざとなったらレイリーに頼もう。

「よし。特定の位置に居続けるのは良くないからさっさと女ヶ島に発とう。」

そう決めた俺は気持ちを切り替えてカウンターに突っ伏していた顔を上げる。そしてハンコックには早く七武海入りしてもらうんだ。それでイベント時以外は匿ってもらおう。そうすれば俺は平和に過ごせる筈だ。

「もう行くのかい？もう少しゆっくりして行こうじゃないか。」

本当に性格が悪いな、このクソジジイは。俺の事も少しは考えてくれ。

そりゃあんたは歳だからゆっくりしたいんだろうけど俺は今世界一の重罪人だから。早くしたいんだよ。

一般市民……特にシャボンディ諸島の人から見れば俺は英雄だろうけど海軍としては抹殺対象だから。

もうインペルダウンに収容とかじゃなくて即殺されるから！

「じゃあレイさんは来なくていいですよ。俺一人で戦って見せます！」

もういいや。あの人はどうせ来る気がないみたいだし。

俺は一人で女ヶ島生活をエンジョイするぜ！

「じゃあ私はもう一眠りしようかな。」

あんたはいつからここに住み着いているんだ。せめて自分の家に帰って寝ようよ。

そして案外簡単に俺を一人で行かせるんだね！俺を拾った親的な心情はないわけだ。

「じゃあ俺は行くんで。また近いうちに来たいと思います。」

「本当に1人で行くのか？」

俺が店を後にしようとする、ハチが声を掛けてくる。

「ああ。あいつらは俺が守るって決めたんだ。ハチも海賊になるなら頑張れよ。」

そう云って外に出て、家に帰ったらハンコックたちの準備が完了していた様で、俺たちは早速出航した。

まあレイリーたちに世話になったのでハンコックたちには礼を云わせた。

それで今は船の上。風の帯を疾走中。

「わ、妾は恐くなんかないぞ……！！」

「あ、姉様は私が守らないと……！！」

「た、助けてアル……！！」

上から長女、次女、末妹の順で震えながら声を絞り出す。まあ震えるのも無理がない状況ですから。

シャボンディ諸島を発つてもう1週間程が経って、現在は先程云った通り風の帯を疾走中。

勿論船底に海楼石が敷き詰めてある訳ないので、なんと大きな海王類が寄ってくるわけですよ。

俺がそれを最強の矛で一思いに殺したり、焰の錬金術で焼き殺したり、紅蓮の錬金術で爆発させたり、水を錬金術で操って串刺しにしたり、風を操ってプラズマ作ったり、怠惰スロウの身体能力使って普通の打撃で殺したり、いろいろ試しながら修行の代わりになっている。

「大丈夫だつて。現に俺は全て倒してるじゃねえか。」

本当に俺は出て来た海王類は全て倒している。自分から行く事などはないよ？そんなことしたら疲れるからね。

そんな事がありながら船は進んでいった。

”金鷹”のアル（後書き）

本当は2話に分けようと思ったんですけどね。そうしようと思った
ら次の話が異常に短くなりそうだったのでやめました。

感想を頂ければ嬉しいです！！

評価もいただければ跳びます！！

お気に入り登録をされて頂いた方には熱い抱擁を（↑おい

とにかくいろいろと待ってます！！

前書きのアンケートのようなものにも答えていただければ幸いです

創帝の定義（前書き）

漸く出来ました！

今回も長めで……どうぞ

創帝の定義

まあ色々あったが女ヶ島到着。 事実小説よりも奇なりとは良く云ったものだ。

本当に女だけの島があるとは思ってもよらなかった。

これはある意味奇跡！人生の楽園！男の夢だ！！

……まあそれは置いておいて今俺たち4人は街中を歩いている。活気があつていい街だ。 なにより女しかないからな。

何故男の俺が入国できたか？

そんな事は簡単さ！

俺の顔が如何見ても女だから。 そしてルフィを女と間違えるくらいこの国の人は男に疎いから。

「それでこれから何処行くんだ？」

街を宛てもなく歩くのもいいが、俺としては風呂に入りたい。風呂つて云うのは体も心も洗えるからな。 ……嘘です。綺麗事です。ハンコックは未だ皇帝ではないが皇帝の血を継いでいると云うのは確かだ。 それならば九蛇城に向かうのも悪くはないと思う。 認めたくはないが女顔だからニヨン婆にもばれないだろうし。

「城じゃ。 妾の家なのじゃから当然じゃろう。」

なんなんだ、この強気な奴は。 5年もいなかったんだから顔とか絶対わからないだろ。

現に周りの人間はハンコックだと云う事に気付いていないし。 ……いや、知らないと云う可能性もあるな。

でもその美貌は本物なので自然と俺たちに視線が集まってくる。

『あの金髪の娘かわいい!!』

『でも少し服がダサいわ……。』

『それに胸も小さいし。』

『そこがいんじゃない! 私は小さい方が好きよ!』

『ええ。私は金髪の娘の隣にいる黒髪の娘の方がいいと思うわ。』

『でもあの黒髪の娘何処かで見たとあるわ。何処だったかしら?』

『気のせいじゃない?』

『そうよね。この街の何処かで見かけたんだわ。』

『でもあの金髪の娘は見たことないわね。』

小声で喋っているのだろうが、俺には全て聞こえている。そして何故か悪口を言われてしまった。

俺の服装は決してダサくはないぞ! エドワード・エルリックを馬鹿にするんじゃない! 奴はチビだが強いぞ! マスタングより弱いが。

それになんだ? 俺は貧乳女と云うレッテルを貼られてしまった。俺は男なのに。それに貧乳好きがいるんだな。

たぶんこの国の人は百合属性を備えているんだろうね。他人^{ひと}の事を変な目で見てるし。

「俺たちすげえ見られてねえか?」

「『俺たち』じゃなくて『俺』よ。」

敢えて俺達と云ったのに訂正しないでくれ。女として見られる哀しさが込み上げてくるから。

せめてもう少しやんわりして欲しかった。如何やんわりするかはわからんが。

「あ、話の続きだけど城って勝手に入れるのか?」

「そんな訳が無かるう。ちゃんと警備の兵もおる。許可をもらわねば入れん。」

まあ当り前だよな。一応皇帝で、一国の王なわけだし。

それなのに護衛の兵が居なかったらどう考えてもおかしいよな。それは最早王じゃないな。

九蛇は国だよな？なら世界会議レヴェリーにも参加するのだろうか。ってか先ず政府加盟国かどうかすら怪しいな。

「じゃあこの国は政府加盟国なのか？」

「今はわかんが昔は違ったぞ。でも何か問題を起こす訳でもなかったんで政府から危険視される事もなかった。」

まあ政府加盟国じゃない方が妥当か。

政府加盟国だったら世界会議レヴェリーの時にビビとの面識が出来たりするし、それに七武海が出るのもおかしな話だしな。

でも政府加盟国じゃなかったら攻撃されるんじゃないかな……。

「ふん。」

まあ今はわからないんだよな。まあ後で誰かに聞こう。

それに俺には関係ないことだし。

……あれ、今更だが何かおかしい。

「あ！何で俺がこの島に違和感なく入ってんだ？俺は元々送って来たら帰るつもりだったのに！」

そうだ。俺は1人旅をして修行でもしようと思っていたのだが、何故か女ヶ島に入ってきて来てしまった。

しかも泊まるどころか訊いてるし。泊まる気満々だよ、俺。

「泊まって行かぬのか？妾は持て成しの準備でもさせようかと思つたのじゃが……。」

帰つてきてすぐにそこまでの権力があるとはハンコックは何者なんだよ。そしてそんな哀しそうな顔をするな。出て行き辛いだろうが、でももう入って来たしな。今日くらいは泊まっていくのも悪くないかもな。

「じゃあ今日は泊まるよ。明日の朝には出るけど。」

「本当か！？ならば早く城に行くぞ！」

「……ああ。」

ハンコックがかわいい。嬉しそうに笑いながら俺の腕に抱きついて来る。俺は幸せ者だよ。

本当にそう思う。政府から狙われなければ、もつとよかつたのだが。まあそれに関しては修行するから良いとして、今日は楽しもう。

流石に政府の目がここまで届いているかわからないし、酒の席は楽しまなければ損だ。

まあ新聞はここまで届いているだろうからニヨン婆辺りにはばれるかな。それがなかったら絶対にはれない自身があるのに。

………そんな女としての自信は要らなかった。もつと男としての自信が欲しかった。

泣けるぜ。

エンヴィー
じゃあ嫉妬の変身を使えばいいじゃないかって？

俺はあれが嫌いなんだ。やった時間の分だけ後から反動で緑色のトカゲになっちまうからな。あんな事は2度と嫌だぜ。

それにトカゲの時は錬金術も他の7つの大罪も使えないから本当に必要な時にしか使わないと決めたのさ。

「姉様、アルと出会ってから元気になられてよかった。」

「でもサンダーソニア姉さんもアルの事好きなんですよ?」

「『も』ってことはマリーゴールドも?」

「わからないわ。でも感謝はしてるし尊敬もしてるわ。」

「あら、そう。なら姉様と私の一騎打ちと云う所かしら?」

「それは違うわ。」

「まあお互い頑張りましょう。」

サンダーソニアとマリーゴールドがそんな会話をしていた事を、先にハンコックに連れられたアルフォンスは知らなかった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

許可を貰って城内に入り、俺はハンコックの部屋で寛いでいた。勿論ゴルゴン三姉妹も一緒に。そして――

「何故ニヨン婆がおるのじゃ。」

恐らくニヨン婆の方が偉いのだろうが、ハンコックは飽く迄も上から目線で喋る。

聞いている通りニヨン婆がいるわけだが、何故か俺の方をジッと見ている。俺は婆さんに見つめられる趣味などは持っていないのだが。まあ見られている理由は大体想像出来るんだけど。

「何故男のそなたが入っておるによじゃ。」

まあ情報源は新聞だろうな。原作でも世界情勢は常に気に掛けている様だったし。

ここの^{カムベルト}風の帯にはニユース・クーはあまり来ない筈だ。あまり来ないと云っても1週間に一度くらいは来る。

他のところと比べれば来る回数が6回も違えばそれは『あまり来ない』になるのだろう。

それよりもハンコックを無視してやるな。

「いや、俺は事の成り行きで……。」

嘘は云っていないぞ。俺だって本当は直ぐに去る予定だったんだ。しかし無意識のうちに島の中に入っていたから今日は泊めてもらう事にしたのだ。この言葉に断じて嘘はない。

「……そなた、“金鷹”がこやつらを助けてくれた事に関しては礼を言おう。じゃがそれとこれとは別じゃ。」

そりゃそうだな。男子禁制つて云う法律があるわけだから。

譬え次期皇帝の恩人でもその法は犯せないよな。これは恐らく初代が決めた規律なのだから。次期皇帝と初代皇帝……偉いのは明らかに初代だ。未だハンコックは皇帝じゃないし、未だ成れるかすらわからないからな。

「それで、俺は出ていけばいいんですか？そうすれば男を連れて来たゴルゴン三姉妹に罪は無い、と。」

「そうじゃ。わかつとるによにやら出て行け。」

「ニヨン婆！そこまでする必要は無かるう！アルは入国の許可を得ているのじゃ！国が認めた客人を1人の意見で追いだすなど言語道断じゃ！！」

いいこといつてくれるじゃねえか、ハンコックも。まあ偶にはだがな。

ハンコックが云っている事も正しいが、矢張りニヨン婆の云っている事の方が正しい。

そもそも入国の許可など曖昧なものだし、入国時は女だと思われるていたからな。入国の許可を認めた衛兵よりはニヨン婆の方が確実に偉いからな。

「そなたは静かにしておれ！これはこやつとによ問題じゃ。皇帝の血を引いているからと云ってでしゃばるにゃ。」

ニヨン婆は凄い眼力でハンコックを睨みつけ、一喝する。それにハ

ンコックはたじろぐどころか、反撃をしようと息を吸うが俺が止める。

不思議そうな顔をされたが、これはニヨン婆の云う通り俺の問題だ。こんな事でハンコックたちに迷惑を掛けるわけにはいかない。

——と云うのは綺麗事。ここでハンコックが次期皇帝になれない状況になれば俺の安息の地が無くなるから。

政府が不可侵なら森の中でも過ごせば平和だしな。それで原作に関わる時は出ていけばだれにも迷惑は掛からないし。

「俺は出ていきます。なのでこいつらには絶対に罪を着せる事はない様に。」

俺は座っていたベッドから立ち上がって自分の荷物がある方へ歩き出す。

「ま、待つんじゃない！それなら妾もついて行くぞ！」

隣に座っていたハンコックは俺の方に駆け寄ってくるが——

「ダメだ（ならん）。」「」

俺とニヨン婆がそれを止める。

俺は声が重なったことでハンコックからニヨン婆に眼を移す。ニヨン婆も俺の方を見ている。

俺は婆さんを見つめあう趣味は無いので直ぐに視線を外して荷物を持つ。

そして窓のある方へと歩いていく。

「何故じゃ！妾がついて行ったらダメな理由でもあるのか!？」

ハンコックは俺とニヨン婆に同時に訊ねる。屈辱である筈の膝を折り、背中を見せる様な体勢……四つん這いになりながらも。

もう背中に刻印は無いが、背中を見られる事に関しては抵抗がある筈のハンコックが、そんな格好をしたのだ。

俺とニヨン婆、それにマリーゴールドとサンダーソニアまでもが驚く。中でもニヨン婆の驚きは俺達とは少し違うだろう。

俺たちが『ハンコックは心に傷がある筈なのに』と云うものとすれば、ニヨン婆は『この男をそこまで信頼しておるのか』と云うもの。

「悪いな、ハンコック。俺には1人が性に合ってるみたいだからな。それに行くのが一日短くなっただけだ。そんなに悲しむ事じゃねえよ。俺が会いたくなったら不法侵入でも何でもして来てやるよ。」

フード付きの長い紅い外套の袖に腕を通して、窓の棧に足を掛けながらハンコックに告げる。

まあ実際俺は明日にここを発つつもりだったし、その意向はハンコックにも伝えてある。その上で今日泊めてくれると云うことだった。なので1日くらい早かろうが変わらないだろう。ハンコックは如何か知らないがな。

そりゃあ寂しくないと云うのは嘘だ。寧ろ凄じい寂しい。

それでも仕方ないことと云うのは世の中に存在するのだ。だから『割り切る』と云う言葉が生まれたのだ。

「妾も——」少し待て、“金鷹”よ。“魔眼の創帝”と云うには何でも作る事が出来るによか？——ニヨン婆……。」

ハンコックは立ち上がって俺に駆け寄ろうとするがそれをニヨン婆が言葉で遮る。

何でも創ると云うのは不可能だな。“創帝”って云うのは色々なものを作り出す事が出来ると云う意味でつけられ、何でも創れるわけ

ではない。

錬金術だってそんなに便利なものではない。が――

「はい、大抵のものなら。」

今は創れると云うべきところだろう。空氣的に、な。

「それにやらば聞く。こやつら3人によ幸せは創れるか？」

そんなことは聞くもんじゃねえ。考える必要もなくて、反射的に答えてしまう。

「当たり前だ。」

敢えて敬語も使わずに、ゴルゴン三姉妹全員に笑い掛ける。それを見て3人も俺に笑いかけてくれる。

本当にいい奴らだ。

それよりニヨン婆はなんであんなこと聞くんだよ。そんな事を言うただけで俺をここに泊めてくれるのか？

それだつたらとんだ不思議生物だぜ、この婆さんは。

「にやらば泊めてやつてもいいだろう。」

とんだ不思議生物だつたぜ、この婆さんは。

まさかあんな単純なことで俺を泊めてくれるとは、世間って不思議。

「それは本当か！？ニヨン婆！」

ニヨン婆の言葉を聞いて瞳を輝かせながらハッコクは跳ぶ。実際は跳んで無いけどね。

「ああ。嘘にやどにやい。」

それを訊いてマリーゴールドとサンダーソニアも嬉しそうに顔を合わせる。

「ただし、1日だけじゃ。明日には皇帝も帰ってくる。留守中に男を入れたとあらば九蛇海賊団の名誉にも関わる。」

そんなところに水を差す様にニヨン婆が告げる。

まあ俺はそれでもいい……と云うかそのつもりなので異論はないが、ハンコックたちは不満そうな顔をしている。

「まあ1日しかいけないんだ！その間に楽しもうぜ！」

その言葉で、宴が開催される事が決定した。

明日にもやるだろうに、よくやるよ……………。

・
・
・
・
・
・
・
・

『かんぱあゝい！！』

急遽集められたにも拘らずこの島の人は元気だ。未だ夕方だと云うのに既に酔っ払っている人までいる。

そして何故か俺の周りには人ばかりが。その中にはハンコックなどもいれば知らない人もいる。そしてマーガレットも。

「ねえねえ！あなたって男なんですよ！」

これが俺に集ってくる一番の理由。物珍しさから寄って来ているのだ。

これにはわけがあって何故かは知らないがニヨン婆がばらしやがった。皇帝が云々《うんぬん》云っていた奴がすることではない。

こんなことすれば皇帝の耳に入ってもおかしくないぞ。さつき注意していたがそんな事で云わないならこの島の人は優秀だ。何において優秀かは知らないが。

まあそこは突っ込んでダメな所として置いておいて。

「男だけど……そんなに触らないでくれ。」

俺は体中触られまくっている。そんなに珍しいのか。

でも珍しいから触ると云うのはおかしいぞ。俺だって触られたら困る部分もあるし、何よりハンコックが醸し出す殺気が半端ではない。その殺気は周りの人に向けられてはいるが、多少は俺に向けている。触られて顔を綻ばせりや当然か。でも普通そうなるでしょ！

だって今まで地味代表として生き抜いてきたんだから、物珍しさからくるものでもそりゃうれしいさ。

「男の人ってみんなこれがついてるの？この名前はなんて云うの？」

ああ、とうとうマーガレットが触れてはいけない所に手を伸ばしてしまった。そして触れただけではなく何度か確かめるように握られた。

そんなことされたら俺の理性は保てません！！

——まあハンコックの前だから保ってるけどね。

保ってはいるんだけどね、何故か触られた被害者の俺にハンコックやマリーゴールドの殺気が向けられるんですよね。

ホント嫌になっちゃう！！

「アルから離れるのじゃ！」

俺の返答の代わりにハンコックが顔を真っ赤にさせながら叫ぶ。その一喝はかなりの影響力があったのか、それともハンコックの剣幕によつてかはわからないがおずおずと引き下がっていく。

「そんな怒る事じゃねえだろ？云えばわかる事だし、叫ぶ事はねえよ。」

俺はハンコックのそんな顔を見たくはないし、何より空気が悪くなると酒が不味くなるので嫌だ。

だから俺はハンコックを諭す。

「アルは嫌では無いのか！？妾以外にあんなところを触られて……

！！」

恥ずかしいならそんな事云うな。顔を紅潮させて云う事じゃねえぞ。それに何故か『妾とアルは結ばれているのじゃ』的な発言をされた。実際俺がハンコックの事を好きと云った事など無いぞ。そして俺はハンコックでもいきなり触られたら嫌だ。

「そりゃ困るけど怒る事じゃないだろ？みんな男を見た事無いんだし、珍しいから触ってるだけだ。ハンコックみたいに厭らしい想いでは触って無いぞ？」

「な……！！妾は厭らしい想いなどせぬ！決してそんな事はないぞ！——しかしアルがそうしてほしいと云うなら妾は——。」

よし、異世界にトリップしてくれた。2年前の俺の様に。これで漸く静かに酒が飲めそうだ。

「あ、お前ら気を悪くさせたならすまないな。まあ今はどつか行ってるから一緒に飲もうぜ。触るくらいならいくらしてもいいからよ。」

しかし未だハンコックが怖い様で、来たのはマーガレットだけ。随分恐いもの知らずだな、この女は。まあ同じ金髪として一杯やろうじゃないか。

「隣、いいかな？」

「ああ。構わねえ。片方は占領されてるがな。」

俺の右側にはハンコックがいて、その近くにはサンダーソニアとマリーゴールドもいる。それで俺の左側にマーガレットが座った。それにしても初対面なのに俺もこいつも敬語じゃねえな。やっぱ同じ金髪だからか？

——そんなわけねえか。

「名前はなんて云うんだ？」

まあ知ってはいるけど、聞いた方が自然だしな。

聞いてないのに知ってたら変な目で見られるだろうし。まあ同じ金髪同士分かり合えるかもしれないねえが。

「マーガレットよ。この島の護衛の兵みたいなものをやってるの。そっちは？」

「アルフォンス・エルリックだ。呼び方は自由でいいけどみんなからはアルって呼ばれてる。」

「じゃあ………いい名前が思いつかない。」

「別にみんなと同じでいいんじゃないの？」

「ダメよ！それじゃあ危険を冒して隣に座った意味がないじゃない！」

危険？

—— ああ、ハンコックの事か。

それにしてもそこまで熱弁する様な事か？呼び方は統一された方がいいんだが。

そして危険とわかってるのに挑戦するとは、流石金髪だ。

「決めたわ！『アツくん』！！」

また妙なあだ名をつけられてしまった。つーかそれって逆に疎外感あるくね？

まあマーガレットがそれでいいなら俺は文句は云わねえけどハンコックが聞いたらどんな反応をするのだろうか。

「じゃあそれでいいよ。」

「わかった！じゃあアツくんの趣味は！？」

それじゃまるでお見合いじゃねえか。

でも、趣味、か。この世界来てからそんな事考えた事無かったな。何気ずつと修行ばかりだったし。

前世だったら確実に読書だな。もう少し誇らしいものが良かった。

例えば……ゲームとか？アニメ鑑賞とか？

—— いずれにせよ誇れねえな。他には無かったのか。

そう、なんか俺とは無縁そうな……ギターとか！絶対にあり得ないんだけどね。

「あれだ。音楽鑑賞！」

何を見栄を張っているんだ、俺は。

産まれてこの方音楽なんて鑑賞したことねえぞ。あるとしてもそれはただ歌番組を見ただけだ。それも純粋な歌番組じゃないやつ。

「へえ……。なんかそれっぽい。」

あ、納得しちゃうんだ。適当に吐いた嘘なんだけどね。凄い罪悪感を感じるよ、うん。

「マーガレットの趣味はなんなの？」

「狩り。」

「怖っ!?!」

「冗談だよ。そんなに野性児じゃないよ。」

よかった。本気だったらどうしようかと思ったわ。

だって目をぎらつかせながら『狩り』って云われたら信じるでしょうよ!何か尋常じゃない殺気が出ていた気がする!

「まあ私の趣味は置いておいてさ、今日1日しかないんでしょ?」

置いておくのか。等価交換が成立しないが、そんな事はよくあることだな。

「そうだな。なにかやりたいことでもあるのか?」

「うん。少しついて来て欲しいところがあるの。そこでお話でもしたくて……。」

「そのくらいなら大丈夫だろ。じゃあ行こうぜ。」

ハンコックは当分の間帰って来そうにないしな。異世界から戻ってくるのはいつになる事やら。

それが遅い方が俺とマーガレットとしては嬉しいのだが。

「マリーゴールド、サンダーソニア。ハンコックの事頼んだ。」

「アルは何処に行くの?」

「んゝ、少し夜風にあたろうと思って。」

そうして俺とマーガレットは城外へ行き、さらに下の森まで降りた。そしてそのまま海岸線へと進んでいった。そしてそこにある大きな岩へと腰掛ける。妙にマーガレットが近いが気にしないでおこう。

「話って云うのは？」

座ってから開口一番、そう云った。

何か大事な話でもなければこんなところまで呼ばないだろう。……
こんなところと云うのは失礼か。

「私はここから見える景色が好きなの。綺麗だと思わない？」

「まあ確かにな。」

黄色く光る月と煌めく星が黒く澄んだ海に反射して、神秘的な光景になっている。夜だから美しいと云うのもあるが、こういうところは昼も美しいのだろう。

「それでここは初めて会った男の人と来るって決めてた場所なの。」

初めて好きになった人とかじゃねえんだな。まあ出会いが少ないから当然なのだろうけど、そこは好きな人って云うべきだろう。

それとも『好き』って云う感覚がわからねえのか？

——それは有り得るな。

百合属性でもなければ人の事を好きになる時なんてないし。……友

達としてではなく恋人としてな。

「それが、アツくん。来ようか迷ったんだけどね、アツくんならいいかなと思って。前は初めて会った男の人って決めてたけど、今は初めて好きになった人にした。」

随分適当だな、おい。

そんなもんなのか？俺が堅苦しいのか？

「っーか『好き』って感覚わかるのか？」

「そのくらいはわかるよ。こう……食べちゃいたいって感じでしょ？前にキキヨウが云ってた。」

間違った事教えてるよ、キキヨウさん。

まあ違う意味ではあってるんだけどね。それは好きとは云わねえだろ。それは食欲か性欲だ。

そしてマーガレットは俺が食べたいのか。少し気持ち悪いぞ。

「それ違うから。」

「ええ！？そうなんだ……。じゃあどんな感じなの？」

「あれだよ。その人がいないと胸が苦しくて、でも直接会って恥ずかしくて話し掛けられなかったり。その人の笑顔を見ると心が温かくなったりとかいろいろだよ。」

まあ人それぞれだけど、大体そんな感じ。」

「じゃあアツくんの事は好きじゃないんだ！恥ずかしくないし、笑顔を見てもかわいいとしか思わないし。」

結構バツサリやってくれるじゃねえか……！！

人が臭い事を云って少し病んでるところにそんな事をするとは……。
恐ろしい人間だ。

少し期待した俺がバカみたいじゃねえか。

「でも……近くにいとドキドキする。」

そう云ってマーガレットは俺の肩に頭を乗せる。その瞬間シャンプ
ーの甘い香りでは無く少し酒の匂いがした事が残念だ。
しかしそれも俺たち庶民らしくていいかなと思った。

創帝の定義（後書き）

感想待ってます!!

1話投稿しない間にお気に入り登録数が+100されていた……。これからも頑張ろうという気になりました!!

旅立ちは2回（前書き）

最後の方が意味不明になってしまった。

途中をなくしたので変な部分があるかもしれませんがそこら辺は勘弁を

旅立ちは2回

「それじゃあ俺は行くよ。」

女ヶ島の港で多くの人が俺を送ってくれた。ゴルゴン三姉妹は勿論マーガレットも、それにニヨン婆や他の人たちも。

そんな大歓声の中を俺は船を進める。目指すは……何処が良いだろうか。

まあそんな事は置いておいて、再開の為の挨拶――

「またなあ!!」

俺はみんなが見えなくなるまで思い切り手を振った。本当に見えなくなるまで。

途中で海王類が襲ってきたが、無視して手を振っていると空気を読んで一時下がってくれた。

「海賊王に、俺はなる!!」

一回云ってみたかったただけだから、本心では無い。寧ろそんな事を本心から言えるメンタルが欲しい。

まあ一つなぎの大秘宝ワンピースがどんなものか見てみたいけど、それはルフィに頼もう。そして見せてもらおう。序でにラフテルへの行き方も教えてもらえると良いな。

そんなことはレイリーに聞けばいいのだが、新世界に入るなど言語道断だ。死ぬに決まっている。

さて、未だ決めていない行く宛てだが、如何したものか。

原作13年前だから……何もないよな。ハンコックイベントは終え

たし。

適当に誰かに会いに行ってみるか！……でも何処にいるかわからねえな。

鷹の目だって戦争真っ只中であろうシツケアル王国にはいないだろうし。赤髪だって未だフーシャ村にはいないし。

考えるより行動するか。先ずは偉大なる航路ではない方にグランドライン風の帯を抜けよう。

グランドライン偉大なる航路だと俺の命が危ない気がするし。気がするんじゃなくて危ないんだな。

「おい！海王類！俺と決闘しろ！！」

さつき引ッ込んだ海王類が出て来て俺に威嚇する。それはお前に決闘の意思があると汲み取っていいのだな？

「よし！じゃあ俺が勝ったら船を引け！いいな？」

俺はそのまま有無を言わせず一発でノックアウトさせる。そして紐で繋いで船を引かせた。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・ ・

・

「ご苦労！もう帰っていいぞ！！」

カームベルト風の帯を抜けたところでその海王類を帰してあげた。なんかすごい

怯えられていたが気にする程でもないだろう。

抜けたのはいいけどここが何処の海かわからねえな。何か特徴でもあればいいのだが。全くと云っていい程手掛かりがない。

せめてあの海王類に島があるところのあたりまで送ってもらえばよかった。まあ終わった事をいつまでも云ってるようじゃダメ人間だな。

だから島でも探しますか！！

そう思い、探し始めた矢先に海賊船発見。昨日は飲み過ぎたから運動がてらにやってみようか。

どうせ偉大なる航路グランドラインの落ち武者が入ることすら出来ない海賊だろう。ひよいひよいと月歩げっぽうで空気を蹴りながらその海賊船に乗り込んでみる。俺の小舟は近くに置いてある。

「なんだてめえ！！」

まあ妥当な反応だな。知らない人間がいきなり船上に現れたら敵意をむき出しにして当然だ。

しかし俺にはそんな事は関係なく、海賊旗ジョリー・ロジャーを見る為に上を向く。骸骨に紳士の様な帽子……見た事無いな。

「ねえあんたら。なんて云う海賊団なの？」

海賊相手に礼儀を弁えている程俺は異常な人間では無いのでタメ口だ。大体そんな事を気にする様な連中は海賊と名乗る資格がないだろう。

「俺たちは演舞海賊団だ！！」

演舞海賊団？踊るのが好きな海賊団か？

そりゃ景気がいいな、おい。

「それで、船長さんはいねーかい？ちよいと体が動かしてえんだ。」

俺のその言葉に周囲にいた人間は全員笑いだす。

俺は別段面白い事を云ったわけではないのだが。それなのに笑われるとム力つくな。

「お前なんか船長が相手をするまでもねえよ！！」

体を動かしに来たのだが、雑魚では意味がないので襲い掛かってくる奴に覇気をあてて全員気絶させる。

そろそろ船長が出て来てもいい頃だと思っただけ――

「てめえがさつきからうるせえ元凶か。」

――出て来た。

まあ五月蠅いのは俺のせいじゃなくてそっちが勝手に騒いでただけだけ。

俺はそれを吐きで倒していたわけだから文句を云われる筋合いはないよね。

て云うかさつさと船長出せばよかったんだよ。

「あんたが船長だな。他とは全く違うな。」

「仲間の恨み、晴らさせてもらっぜ……！！」

ドガッ！バキッ！ボコッ！ドカッ！グニョッ！ベキッ！ボリッ！バリッ！ムシャ！

いきなり襲ってきたのでフルボツコにして撃沈させた後、船内に目ぼしいものがないか探した。

そこで永久指針を見つけて、^{エターナル・ボース}それを持って自分の船に戻ってその針の指す方へ船を進めた。

そんな事で船に戻って来て、今は永久指針の針の指す方へと進めているわけだが、行き先がバルディゴなんだよね。

何？あの人たちもしかして革命軍？

とか思っただけど未だ革命軍は設立されてないんだよね。原作10年前にドラゴンが『力が』とか云ってたし。

だから普通の島だね、未だ。恐らくけど。

でもいる可能性も無きにしも非ずなんだよね。革命軍自体は無いとしてもドラゴンがいる可能性は十分あるし。

まあ序でだからドラゴン含め革命軍になる面々にでも会ってみるか。くまさんとも会ってみたいし。イワさんは……遠慮しとこう。

・

・

・

・

・

・

「“金鷹”か。俺と一緒に来ないか？」

2週間くらいかけてバルディゴに着いた俺だが、何故かいきなり顔に妙な刺青をしているドラゴンに遭ってしまった。

そして何故か勧誘されていると云う……。

まあ確かに俺は天竜人を数人焼き殺しましたとも。でもそれは俺の私情であり革命軍に入りたいからではない。それだけは断言できる。

「いや、遠慮します。俺は世界を敵に回す程馬鹿じゃないんで。」

今でも十分馬鹿なんだけど、これ以上政府に追われる様な事があれば死活問題だ。……いや、既に死活問題であるのに、これ以上は『死』しかないぞ。

「ふはははは！俺たちを馬鹿と云うか！なかなか面白い小僧だ！ますます気に入った。」

気に入られた事よりも、俺は『小僧』と云ってくれた事が嬉しい。勿論ドラゴンより背は高いので小僧では無いのだが、女と間違えてくれなかった事が嬉しいのだ。

今までは会う人会う人すべてに女と間違えられていたからな。

「ありがとうございます。でも俺は政府に狙われたくないので。それで俺は東の海イースト・ブルーに行きたいのですが連れて行ってくれませんか？」

厚かましいとは思っけどね。でも行きたいのだから仕方ないよね。それにドラゴンなら東の海イースト・ブルーに連れて行ってくれそうだし。

自分で行ってもいいけどカイムベルト風の帯があるから面倒なんだよな。あの海王類グランドラインみたいになまた偉大なる航路の中に連れ込まれそうだし。

「流石俺の見込んだ男だ！テキーラウルフを1人で解放しようと思うのか！それなら連れて行こう。」

ああ、この人の思考回路も逝ってるわ。

俺がマリージョアの奴隷解放に参加したからと云ってテキーラウルフまで開放する気はないぞ。

そんなことすれば俺の命が狙われる。確かあそこは天竜人の思いつ

きで橋を造り始めたらしいし。
しかもドラゴンの発言を訊くと俺が1人でやらなければいけないみたいな空気だよね。

「じゃあ遠慮——」「あゝらドラゴン！こんなところで何してツキヤブルのよ？」——最悪だ。」

俺が1人で如何にかして偉大なる航路を出ようと決意して別れを告げようと思った瞬間世界最強のオカマが現れた。

「あいつと話してたんだ。」

「あいつうゝ？あの金髪ガールのことナブルね。」

「あいつは男だ。それにお前も知ってるだろ。あいつは英雄——
「わキャツタブル！！金鷹ボーイナブルねえい！！」——ああ。」

多分だけどね、あの人なら全人類が滅びようとも1人で生きていける自信がある。

だって勝手に1人で盛り上がってるんだよ？そりゃ思っぜ。
ドラゴンもなんかついて行けない様な雰囲気だし。

「それでなんで金鷹ボーイが——いナツシブル！！」

ガボー——ン！！

そんな効果音が出そうな驚愕の表情をしたイワンコフは辺りを見回している。俺は危険そうだったので屈みこんでイワンコフの足元に隠れている。

イワンコフは頭だけが異常にでかいので余裕で隠れられる……と云うよりは足元が見れないから見つからない。

「イワ、下だ。」

ドラゴオオオオンッ！！俺を見捨てるのかああ！！

俺の心の中の叫びは誰にも届く事は無く、ドラゴンは俺を見てニヤニヤと笑っている。糞野郎が。

「なぐにしてツキャブル！！見えないから早く出てきなさい！！」

まあ居場所がばれたら出て行くしかないよな。それにイワさんの足元にいたら踏まれるかもしれないし。

「何を騒いでいる。」

「くま！」

——いいこと考えたぜ！

くまがいたならフーシャ村がココヤシ村辺りに飛ばしてもらおう。

「あの、俺を東の海イースト・ブルの——」「テキーラウルフまで旅行させてやるう」——違う！俺はココヤシ村に行きたいんだ！！」

くままでもが俺を殺したいのか。革命軍は何処まで人遣いが荒いんだ。

と云うよりくまにも知られているのか。

「仕方ない。正式なものになった時はまた誘わせてもらおう。それよりも今フーシャ村と云ったか？」

「え？——はい、ゴア王国にあるフーシャ村に行きたいです。そ

れかコノミ諸島にあるココヤシ村。」

そう云えばドラゴン^{イースト・ブルー}はゴア王国出身だな。そう考えると東の海^{イースト・ブルー}の出身者は大物が多いな。

海賊王のゴール・D・ロジャーにその息子であるポートガス・D・エース、海軍の英雄であるモンキー・D・ガープにその息子であるモンキー・D・ドラゴン、更にその息子のモンキー・D・ルフィ。全員がかなりの大物で、尚且つ“D”の持ち主。そして恐らく全員が覇王色の覇氣の持ち主。

^{イースト・ブルー}それなのに東の海は最弱の海と呼ばれる。これは何か裏があるのだろ^{イースト・ブルー}うが、それはその内ルフィが解決してくれる。

だから俺は何も考えないまま助けたい人だけ助けて世界を傍観しよう。

「フーシャ村を知っているのか？」

「まあ……。風車があつて長閑な村つてことくらいは。」

「そうか……。それならいい。——くま、東の海^{イースト・ブルー}のテキーラウルフまで飛ばしてやれ。」

「ええ！？今の流れはフーシャ村に飛ばされる流れだったのに！」

「もしフーシャ村にお前が行ったらどうなるか考えろ。」

俺が行ったらどうなるか？

——別に何も起こらないと思うけど。実際あそこにはガープくら

いしか来ないし、シャンクスにも会えるし。

それにフーシャ村の人は俺を歓迎してくれそうな気がする。そしてルフィは懷いて来そうだ。

「それはな、村のみんなが歓迎する。」

「馬鹿だ。」

「くま、何処か適当に飛ばしてやれ。」

「ごめんなさ——。」

くまの動きが早過ぎる。手袋は事前にとってあったからその無駄な動きはしなかった。

そして肉球で空気を弾いて俺のところまで急接近。そして瞬く間に俺を弾いてしまった。

せめて『旅行するなら何処がいい』くらいは聞きたかった。

ふう、泣けるぜ。

旅立ちは2回（後書き）

くだされば嬉しいです、感想を。

してくだされば嬉しいです、お気に入り登録を。

してくだされば嬉しいです、評価を。

こんなダメ作者ですがこれからもよろしくお願いします

V S クザン（前書き）

後書で少しだけアンケート？的なものあります

V S クザン

俺は今くまに飛ばされて空中遊泳中です。因みにもう2日以上経つてからそろそろどこかに着いてもいいと思う。

少し補足をする俺は荷物を持たないまま飛ばされた。お金とか大事なものは疑似真理の中に保存してあるから大丈夫なんだけど、発火布の手袋がね。

発火布自体は疑似真理にあるけど手袋にするのが面倒だ。そしてそんな時に限って――

「“金鷹”が空を飛んでいるぞ！追え！！」

大きな海軍の軍艦が俺を見つけてついて来るんですよ。くまに飛ばされたわけだけど距離がそこまで無いみたいで結構ゆっくり飛んでいるんだよ。

だから軍艦でも俺を見失わないでついて来れる。そしてその軍艦は何故か1個隊として3隻で動いていた。

「何！？銃が効かないぞ！？」

くまの肉球に守られている状態だから俺に攻撃は効かないけど……徐々に落下し始めてるんだよ。恐らくここから見える無人島みたいな場所が俺の飛ばされるところだろう。

しかし何故無人島なのだろうか。イースト・ブルー東の海なら何処でもいいと云う様な発言はしたが無人島は無いだろう。……まあテキーラウルフよりまし。

そんな事を考えていると俺は超速で落下し始める。

「ぐえっ！」

そしてあまりの衝撃に蛙が潰された時の様な音を口から出してしまった。

背骨が痛い……。あと心も。

そんな事を考えているとザクザクガサガサと音を立てて多くの海兵が俺を取り囲む。そして持っていた銃を俺に向ける。

これぞまさに八方塞つてやつか。こんな状況は初めてだな。それに多数数を相手にするのは少し苦手だ。

だって多数数と遠距離は焰の錬金術くらいしか使える技がない。遠距離は疑似真理でも如何にかなるけど多数数はなあ……。

そして今は焰の錬金術が使えない。発火布の手袋もなければライターやマツチもないからな。使えるのは――

「お前は完全に包囲されている！！死にたくなければ大人しく捕まれ！！」

「撃つてみるよ。そうだな……お前が撃て。」

「はッ！死んで後悔しろ！！」

挑発成功。後は指定した奴だけが引き金を引けば――

ドンッ！！

海兵も馬鹿が揃っている。ここで一斉射撃すれば俺を殺せると云うのに1人だけで狙ってくるか。

まあ俺的には生き残れるからいいんだけどね。

俺は銃口から放たれた銃弾が異常にゆっくり見えるのを気持ち悪いと思いつつ発砲の時に起きた小さな火花を大火炎に変える。

ボオオウツ!!!

「ギヤアアアア!!!」

そして一気に周囲の海兵を焼き尽くす。自分で出した火花じゃないから力の加減が微妙で誰が誰かわからない様な焼け具合だ。
言うなれば――

「「ウエルダンだな。」」

面倒臭そうに歩いてきた額にアイマスクを掛けて天然パーマな男と声が重なった。まさかこんなところで会えるとはねえ。
そしてその後ろにはモヒカン頭の男が控えている。

「やあ、青雫大将。それから……モモンガ中將か。」

天然パーマの男はクザン。そしてその後ろに控えていたモヒカンがモモンガ。

2人とも海軍本部の強大な戦力。でも何故この2人が一緒にいるのだろうか。見たことない組み合わせだな。

「ボルサリーノがお前に会いたがつてたよ。『今度会ったら殺すよオ』って云つてな。」

そりゃあおっかないな。意地でも会わない様にしよう。

「まあそんなことは置いておいてここは何処ですか？あなたたちがいるような場所では無いと思うんですけど。」

「まあな。グランドライン偉大なる航路の外にいれば不審に思われるよな。でもま

あ仕方ないんじゃない？私用で来たわけだし。」

「私用で軍艦引き連れるんですか。」

「今はチャリが壊れてるからな。悪いかな？」

「いえ、全然。」

ここが偉大なる航路の外って云う事がわかっただけでも上々だな。
グランドライン
大方私用でクザンが出て行ってモモンガが連れて帰る様に言われた。
その途中で俺にあった。

でもクザンが私用で外に出てくるってことは東の海じゃないよな。
イースト・ブルー
心当たりは1つしかないもんな。
ウエスト・ブルー
だとすればここは西の海か……。

「それより俺を捕まえるんですか？少し戦力不足だと思うんですけどね。」

「あららら、最高戦力がいるっていうのに戦力不足なのかい……。」

「黄猿が負けたってこと知ってるでしょ。しかもその時俺は無傷でしたから。」

俺とクザンが会話している途中モモンガは一切手も口も出さずに、
そろそろと来ていた海兵たちを軍艦に戻していた。

賢明な判断だな。俺達3人が殺り合えば確実に周囲に多大な被害が出るからな。

「まあお前の情報は大体集まってるから。そうそう殺られはしないさ。」

「ですねえ。じゃあ俺も全てを出して戦いましょう。」

クザンはだるそうに背中に正義と描かれたコートを投げ捨てた。それと同時に俺も袖を通して羽織っていた紅い外套を投げ捨てる。そしてモモンガもコートを投げ捨て、刀を構える。

「それじゃあ行くぜ！！『疑似真理の扉・解放』！！」

俺の腹は縦にぱっくりと割れて、そこには眼の様なものがあり、黒い手がうねうねと出て来ている。

そして俺はそこから10本のダイヤモンドの刀を取り出す。これは戦う様じゃなくて、陽動用ね。

「「気持ち悪っ！！」」

「俺だって嫌じゃ！」

その光景を見ていたクザンとモモンガは俺を完全否定する。そして俺もそんな俺を完全に否定する。

これをする時は絶対に自分が自分じゃないと思い込んでいる。

「疑似真理の扉・封鎖！！」

叫ぶ必要はないんだけどね。なんとなく云ってみた。これで漸く自分が戻って来たんだし、始めようか。

「あいつは人間か？」

「いえ、同じ生物として認めたくないですね。」

「うつさいわボケ!!」

折角気合い入れたのに台無しだ。人の事を馬鹿にしゃがって。

「それじゃあ今度こそ行くぜ!」

片手に持った5本のダイヤモンドの刀をクザンとモモンガがいる方へと投げ、俺は少し距離を取る。

「あらら、勿体ない。」

「チツ!!」

クザンはそれを見てダイヤモンドの刀を物珍しそうに見ている。一方のモモンガはそんなクザンを見捨てて何かがあると踏んでそこから飛び退く。

やっぱモモンガの方が頭はいいな。クザンは……自然系と云う絶対
ロギア防御の過信だな。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

クザンの周りを取り囲んだダイヤモンドの刀は俺の言葉と同時に大爆発を起こす。俺の手に残っているものは爆発していない。

これは紅蓮の錬金術を利用したもの。紅蓮の錬金術とは術者が触れたものを何でも爆発させる事の出来る錬金術。

それで俺が触れていたダイヤモンドの刀を爆発させた。

これは本来錬成陣を組み込んだものを爆発させるものだが、俺が錬金術を使用する際は錬成陣は不要。なので触れただけで爆破が可能なのだ。

「全く、あの人は……………」

モモンガは爆発が直撃したクザンの方を見ながら呆れている。今は砂埃が舞っているから生死の確認は出来ないが――

「やれやれ、本当に同じ生物かどうかからねえな。」

声がしたので生きているのだろう。

覇気は込めてなかったから大丈夫だと云う訳だ。本当にせこいな。これじゃあどつちが人外かわかんねえぞ。爆発なんだから多少のダメージくらい蓄積してくれよ……。

「あなたも十分人外じゃないっすか。」

ポリポリと頭を掻いているクザンに俺も厭味ったらしく告げる。クザンの体は既に氷では無い。

「忘れてないか？俺がいる事を。」

「銃弾より遅く動く人間のスピードなら余裕で見切れるんで相手にしないでですよ。せめて六式くらい憶えないと。」

モモンガは俺の前に現れて刀を横薙ぎに振るうが、俺はそれを余裕で避ける。そしてモモンガの首に蹴りを叩きこもつとするが――

「俺がいる事も忘れられたら困る。」

クザンが割って入って来たので止めた。そして少しだけ距離を取る。覇気を込めてなかったから俺の脚が凍る。本当に人外だ。

それにしても実力者2人が相手って云うのはかなり戦い辛いな。ス
ピードでは圧倒的だが戦い方は向こうが有利だろう。

幾度もの死線を乗り越えて今の階級まで昇り詰めたのだから当然と
云えば当然か。でもここで負けたらインペルダウンだよな。

……いや、天竜人殺してるからそんなに甘くねえか。即死だな。

「やっぱ2人相手は戦い辛いもんですね。俺の戦い方も現在^{いま}は制限
されてますから。」

何もつけていない手をヒラヒラしてすこしだけヒントを与える。

「手袋、か。」

「なかなか観察してますね。もしかして手配書に載ってました?」

「ボルサリーノの情報だ。」

案外俺は政府から危険視されてんだな。政府と云うより海軍か。
わざわざ黄猿が俺の情報を他人に教えているとは。逃す気はないっ
てことか。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想。今度は武装色の覇気込めたんで、避けないと死にま
すよ。」

残った5本の内3本をクザンに、2本をモモンガに。確りと嘘の忠
告をしてあげてね。

因みに俺は武装色が得意で、見聞色は苦手の部類に入る。霸王色は
俺の錬金術の成長に伴って効力が上がってきている。

その2人は苦い表情をしながらダイヤモンドの刀から逆方向へ遠ざ
かる。

作戦成功。これで2人を引き離す事が出来た。そして最初に狙うのは――

「モモンガ中将、あなたからです。……神殺矛・指無踏！！」
かみしにのぼり しびとつ

ラスト色欲の能力で伸ばした指の先を鋭利にして、指先でモモンガの足を貫く。
リリース憤怒の眼で動きを完全に見切っていたので、当てることなど造作もない。

「ぐあああ！！ぐ……。」

モモンガは痛みから叫ぶが、決して崩れはしなかった。必死に耐えて、俺を睨む。
矢張り中將ともなればそう簡単にはいかないか。なにより俺に向けてくる殺気が尋常じゃない。
子供があてられたら本当に死を経験する様な感覚だ。それを考えれば海軍はとんだ化け物集団だ。

アイスエイジ「氷河時代。俺の事を忘れるなって云ってるでしょうが……！！！」

モモンガに刺した指をそのまま斬り上げようかと思っていたところにクザンが来たもんで反射的に抜いて避けてしまった。
地面が凍っていき、俺の居た所も完全に氷になる。焰の錬金術使えない状況だと氷は厄介だな。爆発は煙が舞って眼が使えなくなるからな。

「別に忘れてはいませんよ……！！」

10m程伸ばした指先を使って高速でクザンの首を刎ねてみるが、

一切の効果は無い。多少の武装色の覇気を込めたがそれでも受け流されるか。

まあ指が凍らなかったただけましか。

「それよりモモンガ中將は退かせた方がいいんじゃないですか？俺は人質なんて下衆のする行動はしませんが巻き込まれる可能性はありますから。」

巻き込まれると云うか、邪魔だ。

怪我人が俺に立ち向かってくる事が先ず無謀。それに動きの遅い人間の攻撃は死角からくらいしか受け付けない。

「まるで自分が下衆じゃないみたいない方だな。」

「今まで俺が殺してきた人間に比べたら十分正当な人間だと俺は思いますよ。」

「ふん。モモンガ、下がってる。」

パキパキと関節を鳴らせながらクザンは俺の方を睨む。その眼には俺しか映っていない。

本気ってことか？

「しかし——。」

「いいから下がれ。てめえごと殺すぞ。」

モモンガを遮り、クザンはドスの利いた声で告げる。その眼は未だに俺にしか向けられていない。そしてその威圧にあてられたモモンガは納得できない顔をしながら退いて行く。

そんなことより大将って云うのはあんなにおつかないのか？それじゃあ黄猿は全然本気じゃなかったってことになるぞ。

あの時は最初に油断していて傷を負わせたから勝てたけど、無傷の大將相手が最初から本気って云うのはかなり厳しいぞ。

そして発言からして俺を殺す気だな。まあ覚悟はしてるけど、死ぬ気はない。

「じゃあ行かせてもらおうか……！！アイス塊・両矛棘！！」
ブロックバルチザン

クザンは氷の大矛を右手に形成してそれを俺に向かって投げってくる。避けるのは簡単だが、クザンは草千切ってるからこれは陽動だな。だったらそのまま返させて頂きましょうか！！

「ほいつと。せいっ！！」

氷の大矛の軌道を見ながら柄の部分をつ掴んで、流れを利用してクザンに投げ返す。

でもただ投げ返すだけじゃ面白くないから――

ブロックン・ファンタズム
「壊れた幻想」

氷の矛を爆発させる。

態々冷たい思いをして投げ返したもののなんだから、そのくらいはしないと。

それにもらったものは倍若しくはもらった以上のものを返せて習ったから。お母さん……田中真奈美、旧姓勅使河原真奈美ありがとう！！……母さんの苗字が良かった……。

「チッ！！めんどくさい能力だ……！！」

アイスサーベルを作ったクザンが悪態を吐きながら俺に向かってくる。まああれくらいは躲せるか。

折角俺がダイヤモンドの刀しか爆発出来ない様な概念を植え付けておいた奇襲だったのに

避けるとは……やっぱ違うもんだな、大将は。

「生憎あなたとの白兵戦は好みませんので——
ブローケン・ファンタズム壊れた幻想!!」

もう爆発出来る刀は持っていない。

それならば周囲にあるものを使えばいい。俺の武器は——

『自然』全てだ!!

そう思って地面に転がる木の葉や砂利を掴む。爆発の規模は小さくなるが、広範囲に攻撃可能で回避も不能だ。

その砂利など投げて、爆発させる。

「甘いんだよ!!」

しかしそれは全て凍らされてクザンにダメージを負わせる事が出来なかった。

白兵戦は得意だがクザンとやるとなればアイスサーベル越しに凍らされる可能性がある。可能性ではないな、確実に凍らされる。そうなれば俺の死は確定だ。

「おらああああ!!」

クザンは横薙ぎにアイスサーベルを振るう。俺はそれを受けること

なく屈んで躲す。

クザンはそんな俺に対して上から頭を目掛けて振り下ろす。しかし完全に見切っているので喰らう筈がなく、俺は後ろに跳んで躲す。それにも怯まずにクザンは俺に何度も斬り掛かってくるが、俺はそれを全て躲しながら錬金術の発動の準備を整える。

「崩れた——」^{アイスエイジ}「氷河時代！！」——ちっ、いつから気付いていたんですか？」

「俺の観察力を舐めない方がいい。」

俺がさりげなく地面に触れて紅蓮の錬金術の用意をしていたところにクザンが地面を凍らせて不発にさせる。

大將は天敵だな、全員。糞みたいに強い。

それに観察力も優れてるとあっちゃあ勝てる見込みがあるかなんてわからない。

「なら、あなたの能力も利用させてもらいましょう！」

パシッ、と手を合わせて、凍った地面に手を着く。その瞬間に紫電が弾けるが氷の地面からは何も出て来ない。

しかし、それでいいのだ。だって俺は目に見えない『水素』をクザンの周りに集めただけなのだから。

「これで終わりだ！！」

手を強欲^{グリード}の能力でダイヤモンド並みに硬化させて、手を激しくぶつけあい、少量の火花を散らす。

そしてそれを焰の錬金術で大火力に引き上げ、クザンの周りの水素に点火する。

「――全てを焼き尽くす業火炎」
フレイズ・バーン・アウト

「ぐあああああ!!!!」

俺の言葉と同時に、クザンの周りは爆音を立てて燃え始める。勿論中心にいるクザンも。

水素と云うのは最も発火しやすい元素。それを今回は使わせてもらった。

焰の錬金術は説明するとややこしいので説明しないが、主に酸素を使っていると云う事だけは伝えておこう。それに水素の発火率を利用させてもらった。

まあかなりの勢いで燃えているがクザンはこの程度では死なないだろう。だが、もう戦えはしないだろう。

これで未だ戦える状態なら大したもんだ。どうせ気絶するだろうから、クザンの部下にでも教えてやるか。

「おい、青雫大将が向こうで燃えてるから早く助けた方がいいぞ。」

「な!?!その前にお前を――」「やめておけ。そいつには喰らわん。」

「――モモンガ中将!!」

俺は海軍の軍艦に乗り込んで親切に伝えてあげたのだが、銃を向けられるとは心外だ。

そして俺でも撃たれれば死ぬぞ、モモンガよ。ラース憤怒の眼で避けられるが、もし当たれば強欲グリードの硬化でもダメージは蓄積される。

銃弾の威力とはダイヤモンドくらい砕けるものだ。実際鉄のトンカチで叩くだけでダイヤモンドは砕けるからな。

地球上でもっとも硬い鉱物の癖に弱いんだよ。……あ、この世界じゃあ海楼石が最強か。今度みつけたら錬金術を試してみよう。

「もう大丈夫なんですか？やるなら相手はしますけど。」

「いや、回復した時に今以上の力をつけて挑もう。お前の云う通り六式でも身につけてな、“金鷹”よ。」

「まあその時は俺も腕を上げてますし、今日は得意分野が使えなかったんで。それと……ここは何処ですか？」

「お前は自分の居場所もわからんのか。」

「いや、飛ばされてきたのは知ってるでしょ。」

「はあ。ここは西の海だ。」
ウエスト・ブルー

「やっぱ西の海か。ウエスト・ブルーならこの近くにニコ・ロビンがいるのかな。」

「まあそんなところで原作を変える気は無いので放置しておく……か？でもそれは可哀相だな。」

「未だ15歳だぞ？ただけ辛い人生送ってたよ。俺に地味な人生と比べると本当に可哀相だな。」

「まあ……原作の時にルフィが助けてくれるだろう。俺ってルフィみたいなキャラじゃないから。救いたくても救えないだろうし。」

「ありがとうございます。それでは失礼します。——あ、本当に青雩大將は気絶してると思うんで早く行ってあげてください。」

「そう云って軍艦から降りた俺は鋼の錬金術で鉄船を創り出し、適当に船を進めた。その後の無人島ではクザンが焦げてヒクヒクとしていた事は云うまでもない。」

V S クザン（後書き）

少しだけ皆さんの知恵を貸していただきたいと思います。

今回漸く Fate 技が出てきたわけです。

それで、錬金術と7つの大罪を駆使して宝具的なものが使えないかあゝ、と思ったわけです。

自分でも少しは考えているのですが、こういったものは他人様の意見も参考にするべきだと思いました。

なので思いついた方は感想までお越しく下さい。

性能まで同じとまではいなくても、見た目などが同じような感じなだけでも十分です。

買い物（前書き）

ストックも残り少なくなってきた……
最後にアンケート的なものがあります。

買い物

さて、俺は人が住んでいて活気のある街に無事に着いた。今日はここで買い物でもしようかと思う。

くまが勝手に俺の事を飛ばしてくるから荷物はバルディゴだし。まあ金があるから如何にかなるけど、発火布の手袋は如何しようか。原材料である発火布自体はあるから問題は無いのだが、俺は裁縫が苦手なんだよな。仕方ないから誰かにやってもらうか。

でも先ずは買い物だな。必要なものは『手頃な巾着袋』と『財布』だけだな。……なんかものすごい哀しい買い物になりそうだ。

だってほかに巾着袋に入れるものなんてない。発火布の手袋はズボンのポケットだし、服は疑似真理の扉の中だし。

実際巾着袋は公共で使うだけのものだからな。人がいる所じゃ疑似真理の扉は解放できないし。

取り敢えず買い物済ませよう……。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

買い物も終了して人目のつかない所で俺は疑似真理の扉を開放して発火布を取りだした。そして昼飯を食べる為に何処かの店に入った。ついでにここで手袋でも作ってもらおうかと思つて。

因みに今更だが俺はフード付きの紅い外套で顔を隠している。ちよろちよると金髪が見えているが、金髪なんてよくいるので関係ないだろう。

「いらつしゃいませ！お一人様でしょうか？」

「あ、はい。」

随分と元気のある女性が出迎えてくれた。黒髪をポニーテールにして、眼鏡を掛けてウェイトレスの服を着ている美人だ。かわいいと云う感情も湧くが、美しいと云った方がいい。そして顔完全ガードな俺に対しても普通に接してくれるいい娘だ。

「それではこちらへどうぞ。」

その美人に案内されて俺が座ったのは何故かカウンター。まあいいんだけどね。

「注文が決まりましたら呼んでくださいね。」

その黒髪美人は俺に満面の笑みを向けて、風のように去っていった。なんと云うか……美人だ。頭も良さそうだし、スタイルもいいし。ああ云う人を世間では完璧と云うのだろう。あの人に惚れられる人間が羨ましいな。

そんなことより周りに客が全然居ないのだが。それに従業員も黒髪美人とおばさんだけだし。

清閑だと云えばそうだが、寂れたと云った方がいいだろう。

「あの、すみませんが手袋を作ってくれませんか？」

流石に店の様子を訊くのは失礼だと思って、手袋を作ってもらう事にした。

それで黒髪美人から店の事とか色々聞けばいいだろう。

「手袋……ですか？」

「いいよ。やってやりな。裁縫道具持って来て、その方の隣で。どうせ客がないんだから。」

「あ、はい！」

黒髪美人はおばさんに云われた通りに店の奥に入っていく、裁縫道具を取って来て俺の隣に座った。その時に花の香りがしたのは気のせいでは無いだろう。

「あの、この布ですか？」

「まあ……はい。如何かしりましたか？」

「いえ、見たことない布だったもので……。」

さつきから思ってたんだけど何処かで訊いた事がある様な声なんだよな。それに見たことある様な顔だし。

そんな事を思いながら俺は裁縫をしている黒髪美人をじっと見つめている。その美人もちろちら俺の方を見ってくる。そんなに見られる事が気になるのだろうか。

……いや、普通気になるよな。近くでガン見されてたら。だからやめとくか。

でも他にする事無いしな、話でも振ってみるか。

「こんなこととして頂いて申し訳ありません。今度お礼がしたいのでお名前を教えて頂けませんか？」

俺のその言葉に黒髪美人とおばさんがピシッと音を立てて固まる。俺は何か悪い事でも訊いたのだろうか。

普通名前くらい教えるよな。何か教えられない理由がなければ。例えば、そう、俺みたいな。

それか『人の名前聞く時は自分から名乗るもんだろぅが糞が！！』的な事かも知れないな。じゃあ俺から名乗るか。別にクザンと戦った疲れも残ってないから大抵のやつからなら逃げられるだろう。

「あ、俺の名前はアルフォンス・エルリックです。」

そして俺の発言と共に石化した2人は崩れ落ちた。———と思ったのだが

「もしかしてあの“金鷹”の？」

黒髪美人はそうでは無かった。おばさんは石化状態を維持しているが。

「はい。ほら。」

そう云って深く被り込んでいたフードを取って顔を曝け出す。

「俺は名乗ったんでそちらも名乗って頂けますか？」

「あ、はい……。ですがあまり公言はしないでください。本名を教えているのはお世話になっているおばさんだけです。」

「……??? まあいいけど。」

なんで本名を隠す必要があるのかわからないが、取り敢えず聞こう。

「ニコ・ロビンです。」

――納得だ。

何処かで訊いた事のある声、何処かで見た事がある様な顔立ち。それに元氣そうには見せているが何処か寂しそうな表情。そして名前を伏せたがる理由。

そして俺は運がいいのか悪いのか、こんなところで巡り合わせるとは。

まあニコ・ロビンとなら同じ犯罪者同士気が合うかもしれないな。

「……………だれ？ニコ・ロビンって。有名なんですか？」

しかし敢えて知らない振り。実際原作知らなかったら子供の頃の写真だからわからないだろうし。

俺の言葉にロビンは鳩が豆鉄砲を喰らった様な顔をしているが、そんな事は気にせずに俺は話を続ける。

「もし有名だとしても俺の方が確実に有名だな。天竜人殺しちゃったし、この間大将青雉と戦って勝ったし。」

俺の言葉にロビンは驚愕の表情を浮かべる。

まあ天竜人の件は新聞には載らなかつたし、クザンの事も新聞には載らないだろう。何か適当な理由でもつけられて懸賞金があげられるくらいか。

「それ……本当なの？」

「ああ。本当だが、如何かしたか？――あ、因みにその時モモンガ中將も一緒だったな。」

「嘘よ……。あの大将青雉と中将のモモンガを1人で相手にして勝つなんて……！！！」

「まあ勝ったんだから仕方ないだろ。気にする程の事じゃねえよ。」

「気にするわ！！」

「おう……！なんあったのか？」

「べつに……。」

「まあ笑えよ。笑わねえと人間が腐るぞ？」

そう云って俺は少し興奮気味なロビンに満面の笑みを向ける。しかし頬を多少赤らめただけで無視されて、再度裁縫に取り掛かった。俺はする事もなくなったのでその場で寝る事に。いつのまにか敬語を使わなくなっていたのには自分でも不思議だ。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

何故かもの凄い殺気が辺りから向けられている。そして少量の火薬のにおいや、血の匂い、そして海の匂いが漂って来ている。俺はそんな中で隣を見てみると、既に手袋を作り終えたロビンが怯えた表情で殺気のする方を見ている。

「なんかあった——。」

「動かないで！！今動くと死ぬわ……。」

まあ殺気をあてられているからな。そりゃ殺される可能性もあるだろう。

しかし殺すのなら俺が寝ていた間に殺せばよかったのに殺せなかった。そしてロビンが怯えている。

つまり後ろにいるのは『殺す度胸のない海兵』ってところか。

「まあ確認ぐらいさせてくれ。」

そう云ってロビンの手から発火布の手袋を奪い取ってそれを嵌めながら後ろを向く。椅子が回る便利な奴でよかった。

「そこを動くな！殺されたいのか！？」

殺されたい人間なんていたら俺が殺してやるよ、そのふざけた幻想を。

生きていて面白くない事なんてないんだから死ぬ意味がねえだろ。

ふざけた事を抜かすな。

それに銃を向けるくらいなら、撃ってみればいい。

「やっぱり海兵か。店の中で銃を構えると云うのは頂けないな。」

俺の目の前にいたのは海兵10人程度。それも正義のコートを羽織っていない下級海兵だ。

それだけの戦力で俺を倒せると思っている事が不思議だ。それにロビンの能力を使えば倒せるし。

まあロビンがそれをしないのは虐げられる様な眼で見られる事が嫌なんだろうな。俺がロビンの事知らないって云ったからかも知れんな。

「こうなつた経緯は？」

「あのおばさんがあなたの首に懸かる賞金が欲しいばかりに海兵を呼んだのよ。」

「じゃあ――」

――逃げるか？」

俺はロビンの手を左手で握つて、右手で指パッチンをして海兵たちをミディアムレアに仕上げてやる。そして巾着を持つて外に走り出す。

「ちよつと！逃げるつて何処に！？」

「そんな事知らねえよ！でももうここにはいられないだろ、ロビン！なら逃げようじゃねえか！」

戸惑うロビンを余所に俺は船の停泊させてある港の方へと走る。

「止まれ！でなければ海軍大佐の――。」

「お勤めご苦労さん！でも今は雑魚の相手をしてる暇はねえんだ！」

港にいた海兵全員を一気に焼き払い、鉄船に飛び乗る。そして錬金術で風を操作して沖に消えた。

さっきみたいな奴が一番面倒臭いんだよな。

対して実力もない海兵がいちいち突っ掛かって来て、俺に勝てると思ってる。支部勤めで俺が倒せたらそいつは大將より確実に強いぞ。そんな事はいいとして、これからどうしたものか。ロビンと一緒に海賊王目指すか？

……いや、それは無謀すぎるだろ。

なら如何しよう。2人で一緒に旅をするか。それともロビンの名が届いていない様な場所に連れて行ってやるか。

いずれにしても原作は変わるよな。まあロビンに訊くのが一番早いな。

「ロビンはこれからどうするんだ？……って、あ。ロビンって呼んでいい？」

「ついつい前世の癖でロビンの事を勝手に呼んでしまったが、怒っているのだろうか、顔を紅くしている。」

「別に構わないわ。私もアルって呼ぶから。」

「じゃあ改めて。俺の名前はアルフォンス・エルリック。別名“金鷹”のアル、若しくは“魔眼の創帝”だ。懸賞金は11億ベリー。よろしくな。」

「あ、そのことだけど、これを見て。さっき逃げる途中に海兵から

奪い取ったの。」

そう云ってロビンは服の中から1枚の紙を取り出す。

因みにロビンは未だウェイトレスの格好をしている。しかもミニスカ。欲情しない方がおかしいけど、ロビンは俺に冷たい気がするから欲情しただけで殺されそう。

まあそんな事は置いておいて、今はロビンが取り出した1枚の紙。その紙には

――“金鷹”のアル。懸賞金12億ベリ―

ふはははははははは！あーっはっはっはっは！あーっはっはっはっは！
っは！

……現実逃避はやめよう。現実を受け止める、俺。あの時クザンとモモンガなんて倒さなければ懸賞金なんて上がる事はなかったんだ。でも死ぬのは嫌だし。

まあ前とそこまで変わらないだろう。それに原作開始まで問題を起こさなければ原作時は自由な筈だ、そうに違いない。

「信じたくないだろうけど、あなたよ。私の8倍弱よ。」

そう云ってロビンがもう1枚、自分の手配書を渡してくるが今はそんなものを見る事が出来る精神状態では無いので軽く流す。

「あら、驚かないのね。それとも放心状態かしら？」

御名答です、ロビンさん。あなたの予想は見事に的中して、現在放心状態です。まあ意識はあるんだけどね。

そして沈黙が数分その場を支配して、俺は漸く復活をする。そしてその第一声は――

「死ねエンヴィイイイ！！序でにクザンも死ねえええ！！！」
これに尽きるぜ。」

因みに大火力の業火でまた海軍船潰しちまった。

そのころ海軍本部

「何かしましたか？」

「いや、妙な寒気が……。」

「そうですか、包帯が少なかったですかね？」

「これ以上は！ぎゃあああああ！！！！。」

クザンは病室で包帯でグルグル巻きにされていた。

「ふう。それよりこれから如何するんだ？」

「そうね。この船のお世話になろうかしら、ふふふ。」

俺の発狂からまた暫く経って、俺たちはこれからの行方について話

していた。

そしてロビンがそんなことを言って優しく微笑みかけるもんだから、恥ずかしくなって目を逸らしてしまった。

云っていい冗談と云っちゃいけない冗談があるぜ……。ロビンと一緒に旅をしたとあっちゃあ女^{ハンコック}ヶ島の鬼が目覚めるからな。

でも本心からだったらかなり嬉しいよな。隣に花を添えながら歩けるんだから。

「いや、それはダメ！」

でもロビンが本心から出ない事くらいわかっている。初見の人間を信用してくれる人がいる程世間は甘くないのだ。だから、傷つく前に断る。昔から消極的なのはかわらねえな。

「そう。なら仕方ないわ。何処かまた働かせてもらえる場所を探させてもらうわ。」

意味深な表情で、そんな事を呟くものだから――

「い、行くところがないんだったら乗ってもいいぞ……！！！」

ついついそんな事を言ってしまった。人を騙して生きて来た筈のロビンを信用してしまった。

でも人を騙してきたのは人が信じられなかったから。ならば俺が人を信用出来る女にしてやろうじゃねえか。

「あら、見掛けによらず紳士的なのね。」

「それは如何云う意味で？」

「もちろん女の子みたいってことよ?」

「ああ、そう。」

俺はロビンの言葉に打ちひしがれていた。

そんな中で、船はゆっくりと進んでいく……………。

買い物（後書き）

最近思い返したんですけど、懸賞金は変えた方がいいですかね？

天竜人はケイミーの購入に対して平気で5億を支払えるくらい、金銭感覚がおかしいです。

アルが殺した中に家族がいれば、当然懸賞金は50億ベリーとかでも何の違和感ありません。

まあさすがにそれはやりすぎだと思いますが、天竜人を殺すのは前代未聞なので10億〜30億と云ったものに変えたいと思います。

これに関しての意見を聞かせてもらえば幸いです。

感想までお越しく下さい

リアリティをお求めてしまった作者からの後書でした。

家政婦が見られた！？（前書き）

なんとなしにストーリーに関係のない日常を書いてみました。

家政婦が見られた!?

「アル……もつと奥まで入れてえ……。」

「あ、ああ……。わりい……。」

「別に謝る事じゃないわ。私がやらせてるんだし――

――掃除を。」

はい、今何か変な事を考えた方は退場。

俺は今ロビンと共に家の掃除をしている。

と云っても2人のものではなく、ロビンが『生活費くらい自分で稼
ぎたい』と云う事で1日限りのホームヘルパーの仕事を請け負った。
だが、ロビンを1人にするのは心配なので俺も一緒に仕事をする事
になり、現在ロビンに掃除の仕方を叩きこまれている途中。

因みに名前を偽って仕事を受け賜わっている。

「だからそこはこうやって……こうやるの。」

ロビンは俺の後ろに回り込んで俺の手を取って思いのままに動かす。
そのお陰でロビンの豊満な胸は俺の背中に押し付けられて、心地よ
い感触が背中に伝わる。

「終わったあゝ。」

掃除も終わり、俺はソファにぐだぐたと転がりこむ。

ホームヘルパーと云うのは与えられた仕事以外は家番くらいしかしなくていいのだ。

料理だって勝手に作ってもいいし、昼寝だってしてもいい。ただその分の仕事が増えるだけだ。

取り敢えず家を守って掃除やらをしていればいいのだ。

「もう、アルったら……。」

そう云えばロビンは俺とかなり打ち解けた。

一緒に船の上で過ごしていれば嫌でも仲良くなるので仕方がないのだろうが、俺としては気が合ったから仲良くなったと思っている。

ロビンもそうであればいいな、と思ったり。

「疲れたんだから仕方なくね？」

「仮にも他人様の家なんだから自重した方がいいわ。」

「じゃあ枕の代わりにロビンの膝を貸してくれたりしてくれる？」

「……はあゝ。仕方ないわね……。」

ロビンは軽く溜め息を零しながら俺の頭を持ち上げて俺の頭のあった場所に座り、そして俺の頭をロビンの膝に乗せた。

まさかホントにしてくれるとは……。

でもロビンに恋愛感情は無く、子供の世話でもするかのようなもののだろう。

「ロビンってさ、大人だよな。」

俺がふと零した言葉に、ロビンはピクリと異常な反応を示す。

「それは私がおばさん臭いってことかしら？流石私より年上で童顔なだけはあるわね。」

如何やらロビンには厭味に訊こえたらしく、額に青筋を浮かべながら言葉を紡いでいく。

「いや、違うつて。ロビンは面倒見が良く、優しく、美人だからそう感じるんだよ。」

別におばさんって意味じゃなくて、大人っぽいつてこと。

——いや、それじゃあさつきと云ってることがかわんねえな。なんて云うか、ロビンは憧れの女性像って感じだな。」

今云った事は全て本心だ。

ロビンは原作の頃から好きだったが、実際に逢ってみるとより好きになった。

「そんなこと云っても何も出ないわよ……！」

ロビンは少しだけ顔を紅くして、俺から視線を逸らす。

「ロビンでもそんな顔するんだあ。」

俺は恥ずかしそうなロビンをからかう様にそう告げる。

好きな女の子を虐める——小学生の様だが
それくらい今のロビンはかわいい。

「わ、悪いの？私が感情を表に出したら……。」

「別にそんな事は云ってないけど、逢って間もないころは全然違ったから。」

「ん……。自分でもそう思う。アルと逢ってから、少しだけ。」

照れたように頬を染めながら視線をあちらこちらへと向けるロビンはやっぱりかわいい。

「ちょっと寝返り打ちたいんだけど、いいか？」

「いいわよ、別に。」

「サンキュ。よっこらせ、と。」

今まで上を向いていた体を横に向ける。

すると俺の目の前には黒い色の何かがちらほら——いや、視界の100%に埋まっている。

見ちゃいけない見ちゃいけない、とは思っけど見てしまっのが男の

——いや、地味代表の性だ。

色は……ロビンの名誉の為に云えないが、察しはつくだろう。

「アル、如何かした——って何処見てるの!？」

「いや、待て!!これは事故だ!」

「いくらアルでも女の子のぱぱぱぱ——」「パンツな。」——
最低——！」

顔を赤くしたロビンが俺の首元や肩から腕を生やして俺の首を折ろうとしてくる。

だが、そんな事されたら一生車椅子生活なので生えてきた腕を全て掴んで、首がへし折られない様に耐える。

「もうしない——！絶対に見たりしないから——！ゆるしてつかあさい——！」

俺は近所迷惑だったり寝ているであろうペットが起きるであろうことなど一切考慮せずに本気で叫んだ。

そんな、自分の命が懸かっている時に気にしてたら俺はとくに死んでる。

「もう……一生見てくれないの？」

生やした腕を全て直したロビンは俺の言葉にシュンとする。

全く理解不能だ、女って奴は。

いきなりキレたかと思えばいきなり寂しがったり、微妙に頬が赤いし、何なんだよ。

「ロビンがそれを望むなら見ねえよ。つーか今のだって事故だったし、俺は嫌がる女の下着は見ねえ。」

——って云うと嫌がらない奴のは見るみたいな感じになるけど、偶々見えた時くらいしか見えないと思う。」

「そう……。」

俺が多少嘘は混じっているが本心を告げると、ロビンの表情はさっきより哀しそうなものになる。
見るなッて云われて見ないッて云ッてその反応はおかしいだろ。

「もしかして見て欲しいのか？」

「——！！！！最低！！」

俺の言葉にロビンは再度激昂して近くにあったテーブルやら椅子やらソファやらを俺目掛けて投げてきた。
女ッてやッぱわかんねえわ……。

sideロビン

アルッてホントに女心がわかってない。

そのくせして偶に人を引き付ける様な発言をするから、私も惹かれていつてしまった。

一緒に旅をしてずっと一緒にいたから、アルの魅力は私が一番よく知っている。

多分アルの欠点も。

その欠点が今云った『女心』だ。

『パンツな。』

『もしかして見て欲しいのか？』

そんなデリカシーのない発言が、アルの魅力を引き下げる。

けどそれがあの顔からは発せられるものとは考えられなくて、ある意味ギャップ萌えかもしれない。

だからそんな発言をされても笑って許してる自分が心の中にはいるけど、私は好きな人にはいつい冷たく当たってしまう。

世間ではそれを『ツンデレ』と呼ぶらしいけど……私はツンなんかせずにいつもデレていたい。

でもそんなものをアルに魅せるとなると恥ずかしくて絶対に出来ない。

もっと素直になれたらな……。

そうなりたいたら、頑張るしかないか……。

「ごめん、やり過ぎたわ……。」

既に手遅れなときに、私は謝る事をした。

＼sideアルフونس＼

既に手遅れな時に、ロビンが誤って来た。

手遅れと云うのは俺がでは無く部屋がだ。

リビングにあつたものは全て散乱して、どこになにがあつたのかわからない様な状況。

幸い壊れたものがない——と云うより壊れそうなものは全て俺が受け止めたのでよかった。

「いや、俺が悪かったから。それよりも早く片付けしようぜ。」

俺は周囲に散らばったテーブルやらを元あつたであろう位置に戻しながらロビンを促す。

これをしたのはロビンだから片付けをするのは当然だが、その原因を作ったのは俺なので素直に俺も手伝っている。

「う、うん……。」

ロビンは罪悪感があるのか、俺の顔も見ずに作業に取り掛かり始めた。

いや、罪悪感なんてなくて俺の顔を見るのも嫌になったとかか？

——有り得そうで怖い……。

「ねえアル……。」

「な、なんだ？」

そんなことを考えていると不意にロビンが話しかけて来て、俺はそれに驚いて多少動揺しながらも普通に返事をする。

「これからも……よろしくね？」

「ホント、意味わかんねえ……。」

「何か言った？」

「別に。そんな当り前なこと今更云われなくてもよろしくするっつの。」

「そう。じゃあお礼の前払い。」

そう云ったロビンは溜め息を吐いている俺の頬に唇を落とした。

「ちよっ……！ー！」

自分の顔に恥ずかしさで熱が溜まっていくのがわかる。
それと同時にロビンの方からも微妙にそんな感じのオーラが伝わってくるので見なくても顔が赤くなっているのがわかる。
そんな気まずい空気の中で俺とロビンは片付けをして、ちゃっかりと報酬を貰って家を出て、その島を後にした。

家政婦が見られた！？（後書き）

懸賞金に関しては16億くらいでいこうかと思っています。

みなさんの意見を平均したら27億とかだったんで、それは行き過ぎ？と思ったので今のところ16億で。

意見がある方はドシドシください。

あ、ロビンとの日常をもう1話くらい書こうと思ってるのでその意見もいただければ嬉しいです

格の違い

時は流れて原作8年前。俺は今1人で船を進めている。

ロビンとは云うと、1人で旅がしてみたいと云う事で、東の海イースト・ブルの何処かにいると思う。

俺も現在東の海イースト・ブルにいるの。勿論、原作を変える為に。

正直迷った。道にじゃなくて、選択な。

その内容は『ナミイベントに介入』するか『フランキーイベントに介入』するかだ。しかしまあ、俺がフランキーイベントに参加して

もどうにもなりそうにないのでナミイベントに介入する事にした。それで船を進めていると云う訳だ。そしてコノミ諸島のココヤシ村が見える場所まで来た。

しかしココヤシ村の風景が見える事は無く、見えるのは船首が鯨を象った大きな海賊船だけだ。

その海賊船が掲げる海賊旗は紅い鋸鯨ジョー・ロジャーの様なマーク。海賊なら鰐サメの様なマーク。海賊なら鰐サメの様なマーク。海賊なら鰐サメの様なマーク。

その海賊の一味の頭の名前はアロン。“ノコギリ”のアロンとして嘗て“海侠”のジンベエと肩を並べた程の強者だ。

しかし所詮は逸れ者の集まり。1人1人の力など高が知れている。そんな海賊共と俺は対峙している。

さっきまで俺は船の上にいた筈なのだが、これが主人公補正と云う奴か。光より速く動いちまったぜ。

「おい、訊いて——。」

少し訂正。俺はアロン達を探してココヤシ村の港に来たのだが、雑魚しかない。村人の気配もしないし。

大体事の始まりはあの女の所為だ。無謀にもアーロンさんに勝てる
と思って喧嘩を売るからこうなるんだ。
これだから頭の悪い人間は――

「なあ同胞よ。今誰かが俺を呼ばなかったか？」

ベルメールとか云う女の頭を踏みながらアーロンさんは俺たちに訊
ねる。俺たちは否定も肯定もできず、ただ曖昧な言葉を返す。

さつき俺が訊いた叫びの事だろうが、アーロンさんと呼んでいたか
は聞き取れなかった。それは全員が同様らしい。

そして俺は頭に風車をつけたこの村の駐在である男がベルメールと
云う女に何やら叫んでいるのを見ながら家の中を確認する。

「おい、アーロンさん！！3人分の食事が用意してあるぜ！3人暮
しの様だ！」

しかし俺のそれは風車の男に簡単に否定される。

話によると今日は招待されているらしい。クロオビも村の名簿を確
認しながらベルメールが1人暮らしだと云う事を肯定する。

「よし……。10万ベリーだ、奉具を払え。それとも死ぬか。」

アーロンさんはクロオビの言葉を信じて、ベルメールに金を要求す
る。その要求を呑んでベルメールは10万ベリーを渡した。

俺たちはそれを貰って引き返そうとするが――

「子供2人で10万ベリー………！！！」

その言葉で全員がピタリと止まる。特にアーロンさんの表情からは
怒りしか読み取れない。

「それは私の娘たちの分。私の分は足りないわ。」

「アア!？」

「ゲンさんごめんなさい……。私……。家族がいらないなんて言えないや。たとえ命を落としても……………!!」

□先だけでも親になりたい。あいつら——

——私の子でしょ？」

ベルメールと云う女は涙を流しながら、そう云った。

俺としてはここで号泣だ。一個人としてこれを見ていたらそれはもう泣く。涙で海が出来る程に流し続ける。

しかし今は違う。魚人海賊団のアーロン一味としてここにいる。

それなのにここで泣きでもしたら俺の立場がない。

この女は自分の命を捨てる馬鹿野郎だ。

「ガキが……いるんだな？」

アーロンさんからは既に怒りのオーラが滲み出ている。

アーロンさん風に云うと『下等生物が魚人様を騙したのか……………!!』

!!』と云った感じが。

俺がそんな事を考えていると子供2人がベルメールとか云う女に泣きながら抱きついていて。そして何か色々云っていた。

あまりに感動し過ぎて憶えられないくらいに心で泣いた。表面上は

無表情だが。

そしてココヤシ村の村人も雄叫びを上げながら俺たちに向かってくる。アーロンさんの指示で殺さないように相手をしろとのことだった。

「お前が最初の見せしめだ……！！くだらねえ愛に死ね。」

アーロンさんはそう云ってベルメールとか云う女の頭に銃をつきつける。

俺は村人と戦わなければならないのだが、妙な胸騒ぎがして如何も集中できない。昔にもこんな事を感じた事がある。

「ノジコ!!! ナミ!!!」

「大好き？」

その瞬間、アーロンさんが引き金を引こうとする。
なんだ？この胸騒ぎは。近付いて来る、恐ろしいが、どこか懐かしい感覚。それは――

「死ねえええええ！！！」

—— 思い出した、あいつだ。

Sideアルフォンス

「死ねえええええ！！！」

銃をベルメールさんの頭につきつけるノコギリ鼻の魚人に目にも止まらぬ速さで蹴りを入れる。

まあイメージ的にはそんな感じだが、だれもが視認できる速さ。

「ギリギリセーフ……か？」

アル!!!

「よお、久し振りだな。ココヤシ村の皆さん。それにハチもな。」

大体訊いた通り、俺はココヤシ村のみんなと面識がある。

まあ些細なことで、如何でもいいし、何より聞いても面白くない話なので云わない。勿論ナミとノジコとも面識がある。

そんな事は如何でもいいか。ここにいる全員が俺の登場に驚いてるし、何より驚いているのはハチだろう。

「おいおい、ハチがなりたかった海賊つてのはこんな下衆共の集まりか？」

俺の挑発的な言葉に魚人海賊団の全員が俺を睨む。

特に八子以外の幹部の剣幕は前世の俺なら見ただけで気絶するほどだ。

「なんでアルがこんなところに——。」

「まあその話は後からする。それよりもこっちが先だ。」

俺に訊ねてくるベルメールを制止して魚人海賊団と向き合う。ハチ

以外のやつは全員やる気満々だ。

もしかして俺の事を知らない？

自分で云うのも何だがかなり有名だぞ。いくらか魚人海賊団の奴も助けた筈だし。

「さあて問題です。俺の名前がわかる人、答えてみる。」

「“金鷹”のアル……！！その首に懸かった賞金は12億ベリー……！！」

「よおしい子だ、ハチ。お前は昔からかわらねえみたいだな。」

ハチの言葉に魚人海賊団はどよめき始める。アーロンは別な。

「じゃあ第2問。その“金鷹”のアルさんが一番最初に起こした事件はなんでしょうか？」

「マリージョア襲撃の奴隷解放……！！」

俺の質問にまたまたハチが答える。

「じゃあ俺に助けられた奴、挙手。」

それに対しては誰も反応しない。まあハチは奴隷じゃなかったし当然か。

「目の前にいるギザギザ君。俺は君がマリージョアにいるところを見たのだが、見間違いだったか？」

俺の目の前にいるアーロンは奴隷としてマリージョアにいた。それ

を俺はハッキリと憶えている。

アーロンは悔しそうに拳を握るが、反論しようとしな。

「じゃあ最後の問題。俺とお前ら、どっちが強いでしょうか？」

そこで俺は覇王色の覇気を全快に出してハチ以外の魚人に当てる。残ったのはアーロン含め幹部4人。ハチとチュウとクロオビだ。しかしその内のクロオビとチュウはかなり震えている。あいつらが一番かわいそうだな。気絶した方がどれだけましだったか。

「貴様……同胞達を……！！！」

「おいおい、いくら殺気を出そうが俺には意味ねえよ。それに動けないんだろ？そこから。動けるなら来いよ。」

アーロンは俺に殺気をあててくるがその効果は皆無。逆に心地いい感じだ。

殺気をあてられて心地よくなる精神破綻者ではないが、アーロンの殺気など子供が殺気をあててくるようなものだ。

「“金鷹”……！！」

「喋ってないで来たらどうだ？それとも俺から行こうか？」

動こうとしないアーロンに対して挑発してみるが、一向に動く気配がない。仕方ないので覇気をあてるのをやめてあげた。するとクロオビとチュウの震えも止まり、アーロンも一歩前に踏み出す。

ハチはずっと傍観している。

しかし俺は一步も動かずに、ただ両手をクロオビとチュウに向けるだけ。

「かみしにのほじ神殺矛・しぶやうて指無踏」

俺の両の手の人差し指が一瞬で伸びて行き、確実にクロオビとチュウの心臓を捉え、貫いた。

「「がはッ……!!」」

俺が指を抜くと2人は口から血を吐いて倒れる。指程の孔しか開いていないので死んではないだろう。

『来いよ、ド三流。格の違いつてのを見せてやる。』

「よくも……同胞を!!」トウース「トウース歯・ガム!!」

アーロンは自身の自慢の歯を抜いて両手に持って俺に襲い掛かる。後ろには……ココヤシ村のみんなが。だから俺には避ける事が不可能。ならば噛ませればいい。

そう思つて腕だけをダイヤモンド並みに硬化する。全身を硬化させても良かったが、キモくなるのでみんなには見せたくない。

ガキンッ!!

アーロンの歯を両腕で受け止めると、自慢の歯は見事に粉碎される。

「鯨の歯って云うのはそんなに軟弱なのかい？」

「チッ!!」

アーロンは歯を砕かれた事に一瞬怯みながら、俺の腹に横薙ぎに蹴りを入れてくる。俺はそれを避けずに硬化で防ぐ。

ガンッ！！

まるで鉄を蹴った様な音が辺りに響く。

俺の腹にダメージは零だが、アーロンはそうでもないらしい。薄汚い水色の様な足が赤く腫れ上がっている。

「てめえ……何者だ？」

ギロツと睨みながら、ドスの利いた声で訊いて来る。アーロンの目はキレた海王類そのものだ。

しかしキレた海王類などよく見かけるので然程驚きはしない。それに魚人がキレたらそうなる事も知っている。

「さつきから訊いて無かったのか？俺は“金鷹”のアル。探検家だ。」

俺の言葉に額の青筋の彫りを更に深くする。

自分から訊いておいてキレられる意味がわからん。貴様は阿呆か。

「そんなことを訊いてんじゃねえ！！能力者かって訊いてんだ！！」

「答える義務はないな。」

もうそろそろアーロンとの会話も飽きて来た。

アーロンの攻撃程度なら一切効かないが、苛々は募る。だから――

「今日は快晴で良かった。影の激痛」
ステイツ・オブ・シャドー

プライド
傲慢の能力を使って影を操り、アーロンの足を地面と縫い付け、喋れない様に口を縫い付け、息が出来ない様に鼻を縫い付け、更に手も動かせない様に手と横腹を縫い付ける。
アーロンはその所為で喋る事も動く事も出来ない。

「縛られる感覚はどうだ？糞が。——薔薇の黒陰」
リカモ・オブ・ローズ

そしてその状況から更にアーロンの腹に影で黒薔薇の刺繍を創り出す。アーロンは口を開けて叫ぼうとするが無理矢理開ければ唇が千切れるので開けられないで悶えている。

そして手足を動かそうにも動かせないでいる。
動かそうと思っても動かせないが、動かそうとすれば俺が締め付けるからだ。

「奴隷じゃなくなつて真面目に人生を歩めばこんなことにはならなかっただろうよ。だからこれは俺からのプレゼントだ。——影の
ファントム
静粛者」

そして更にその状態で影を操って心臓を一突き。
それでアーロンが力なく項垂れたところで、俺は全ての影を抜いて、自分の影の形に戻す。するとアーロンは気絶して地面に崩れ落ちる。

「ハチ、海兵に捕まりたくなかったら早く逃げろ。いるんだろう？
なあ、ネズミさんよ。」

さっきから隠れているつもりだったのだろうが、ネズミ大佐が気配も消さずに俺とアーロンの戦いをずっと傍観していた。
それも1人では無く、かなりの人数を連れて。大方アーロンと一緒に

に俺も捕まえようと云う魂胆だろう。

「チチチチッ……！！いつから気付いていた。」

「そりや最初^{はな}から。」

「チッチチチッ……！！動くなよ？動けば殺すぞ。」

ネズミ大佐は部下全員に俺に銃を向けさせて、威嚇している。

「なんのつもりだ？」

「チチチチッ……！！“ノコギリ”のアーロンと“金鷹”のアル、俺が捕らえたら何処まで昇進できるか、わかるか？」

「そんなもん興味ねえよ。」

「チチチチッ……！！——中將さ！！」

ジャキンジャキンと散弾銃^{ショットガン}の引き金を引くような音がして、海兵たちは俺に近付いて来る。

それにしても中將にまで就任できるのか。そりや俺の首を欲しがる海兵が沢山いるわけだ。

たかだか22歳の青年の首にそこまでの事をする海軍も如何かしてるな。

「なあ、首から手が生えて、首の骨を『ポキッ』ってやられてみねるか？」

俺の言葉と同時に海兵全員的首根っこや肩の辺りから手が2本生え

て、首を有り得ない方向に曲げる。その瞬間ゴキゴキ、と云った様な音がしたが気にしないでおう。

「チツ……！！何をした！？」

「別に、俺は（・・）なにもしてねえな。」

「ええ、今は私がしたことだもの。」

森の方からロビンが悪戯な笑みを振りまきながら歩いて来る。それに気付いたネズミ大佐は勝ち目がないと悟ったのかその場に座り込む。

「さあ、アーロンを捕まえてこの場を去るか、それともここで殺されるか、決めようか。」

「わ、わかった！」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「いやゝ助かった！礼を言うよ、アル。」

「いやいや、別に当然の事をしたまでだ。」

俺とロビンとココヤシ村の人達は今宴の真っ最中。

ネズミ大佐はと云うとあの後アロン達を捕縛して、何処かに連行していた。それで俺とロビンの事も黙らせておいた。

「それよりアル、何でこんなところにいるんだ？」

「てめえこそ、立派な海賊になるんじゃないかったのか？」

何故か俺の友達だと云う事でココヤシ村のみんなは歓迎ムード全快のハチが俺の隣にいる。まあそれを快く思わない人が3人いるわけ
で――

「『なんであんたがアルの隣に座るのよ!!』」

ロビンとナミとノジコが声を揃えてハチに怒鳴る。

そこは『なんで魚人がこの村に居座ってるのよ』が妥当な怒点だと思うのだが、如何やらその3人には関係ないらしい。

別にもう片方の隣が空いてるわけだし怒る事じゃねえだろ。それに3人じゃ如何やっても俺の隣に座れないし。

「にゅ！？それは友達だからだ。」

「それがなんなの！？もしかしてあんたベルメールさんにした事忘れたんじゃない――。」

「あ、あれは誤解だ！俺がやったわけじゃない！」

「じゃあ如何して止めなかったのよ！」

「それは……。」

ハチが未だ10歳にも満たないナミに言葉で負けてる。
なんか……哀しい人生だな。

「それよりハチ、魚人島に帰ってたこ焼き屋でも始めたらどうだ？
当面の間は海賊なんて出来ないだろ。」

「それもそうだ！じゃあ俺はもう行くよ。ここにいると殺されそう
だ。」

「じゃあな、ハチ！」

「ああ！今度食べに来てくれ！」

ハチはそう云って海の中に飛び込んでいった。

さて、俺の両隣が空いたわけだが何処に誰が座るか……。

「じゃあ私とナミと一緒に座って、お姉さんは向こうに座って。」

見事に和解してナミとノジコが俺の右に、ロビンが俺の左に座った。

「じゃあかんぱーい！！」

今日何度目かの乾杯をして、その夜は更けて行った。それにもかかわらず、村人の歓喜の声は途切れる事が無かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
「もう行っちゃうの？」

ロビンは昨日の内に村を発って、また何処かに行ってしまった。そして今俺はナミとノジコに涙目＋上目遣いで強請られている。かわいいんだけど、その願いだけは聞き入れる事が出来ない。

「ああ。俺がいたら島の人に迷惑掛かるし、好きな村を戦場になんてしたくないからな。」

最近では俺の居場所が特定出来たら大将1人と中将3人が動いていると云う噂を聞いた事がある。飽く迄噂の範疇であるが。

もしそんなバスターコール以上の戦力がココヤシ村に来れば村は跡形もなく消え去るだろうし、そうなれば村人は全員死んでしまう。それにそんな戦力を相手に出来る程チートでは無いので一定の場所に長く留まる事は出来るだけ避けたい。

「でも……。」

「駄々捏ねちゃダメだろ？それにナミやノジコが嫌いで出て行くわけじゃないんだから。」

「わかったか？」

「アルの云う通りよ。それにアルがいたら大事な娘になにされるかわからないわ。」

「そんなことしないって……。」

「でもアルになら……。」「」

なんかカオスな展開になって来たな。

ベルメールが若干俺に嫉妬する様な感じで、ナミとノジコは何を考えているのか頬を染めてトリップしている。

ナミとノジコは未だ子供だろうが……。ベルメールも考えて発言しろよ。

「それじゃあ俺は行くから。」

「気をつけなさいよ。」

「あら？心配してくれんの？」

「当たり前よ。あなたの保護者は誰よ。」

「いねえよ、そんなもん。」

「相変わらず素直じゃないんだから……。」

ベルメールとそんな会話を繰り返して、俺はココヤシ村を去った。

何やら村の方からナミとノジコが騒いでいる声が聞こえるが……。気のせいだろう。

それよりも俺は、次なる平穏を求めて海でも回りましようか。

エース登場

気のせいだろうね。気のせいだと信じたいよ。

だって俺はこんな事になる様な事は一切していない。

と云うか何故俺は2人で船の上に浮いているかわからないんだよね。

「なあ。黙ってないでなんか喋ろうぜ、アル。」

そして何故かめっちゃめっちゃ馴れ馴れしい。

俺と目の前にいる奴は初見な筈だが、気のせいなのか？

因みに目の前にいる男の特徴を説明すると半裸。

上は何も着ておらず、下は膝下まである黒い短パンだけ。

他にも首に牛みたいなネックレスをつけてたり、またまた首に紅い数珠みたいなネックレス付けてたり、腰に銃を挿していたりと色々な特徴がある。

そのなかでも最も特徴的なのはオレンジのハットと左腕にしてある

『ASC E（Sは上から×が描かれている）』と云う刺青。

そして黒髪に雀斑。そばかす

ここまで云えばわかるだろうが、ポートガス・D・エースその人だ。

「なんで俺がお前の船に乗ってんだよ……。」

俺の船に乗って来たならば許そう。

しかし何故かこのエースとか云う野郎は俺を自分の船に引き摺り込んだのだ。

不幸中の幸いは荷物を掴んでいたので新しく巾着袋を買わなくて済んだ事だけだ。

「まあ細かい事は気にするな！それよりアル、お前ってルフィと知り合いらしいな！」

「ああ。ってか何でそんなに馴れ馴れしいんだよ。」

「だって弟の友達だろ！？だったら俺の友達みたいなもんじゃねえか！」

「はあ。意味わかんねえよ、その理論。」

エースの云う通り俺はルフィと知り合いだ。
友達と呼べるかどうかは不明だが。

偶々フーシャ村に寄ってみたらルフィと仲良くなった。
因みにシャンクスとも会って、腕消失イベントを阻止しといた。

「それよりアル、俺の仲間にならねえか？」

「そのつもりで俺を無理やり連れ込んだんだろうが……。」

「当たり前だろ？わざわざ敵を船には乗せねえよ。」

まあエースの云う事は妥当だが、俺が何故エースと行動を共にせねばならんのだ。

それにこの場合だと俺が副船長だな。未だエースしかいないし。
そうなると船長より俺の方が大分有名だぞ。

新世界に入るまで……いや、新世界に入っても俺の相手を出来る敵なんてそうはいねえから絶対につまらねえよ。

「やだ。」

「何でだ!？」

俺の言葉にドーーーーーンと云う効果音がつきそうな表情で驚くエース。

「なんでつて……俺の事知らねえのか？」

「知ってるぞ。アルフォンス・エルリックだろ？それ以外は知らないけど。」

これでも結構有名だったはずだが、バツサリだな。そりゃあこの5年間は息をひそめていたけど忘れられる様な犯罪者じゃねえよ。

—— いや、忘れたとかじゃなくてこいつはもともと知らないんだろうな。

俺がルフィの恩人ってこと知っておいて、それはないだろ。

「……はあゝ。俺の首は12億で売れる。」

さつきも云った通りこの5年間は何の問題も起こしてないし偉大な^{グラン}航海で海賊を風潰しに倒していったって事もないから懸賞金は上がっていない。

まあこれ以上上がるなんてことはないだろうな。

「お！ホントか!？こりゃいい拾いもんした!」

いや、そこは断って欲しい所だったんだが、ますます気に入られちゃった。

なんてこった……。これじゃあホントにエースの仲間だ。

白ひげの2番隊隊長って云うのは悪くないかもな。

「もういいや。グランドライン入るまでくらいなら付き合っ
てやるよ。」

「まあそう連れない事云うな！一緒に海賊王目指そうじゃねえか！」

「いや、海賊王になるのは船長のお前だけだろうが。」

――疲れる。

エースのハイテンションぶりは異常だ。そんなに俺がいる事が嬉しいのか。

いや、それは自意識過剰か。俺がグランドライン内でも一緒にいると迷惑甚だしいよな。

「先ずは1人目の仲間確保だな！それでアルは何ができるんだ？」

「何って……例えば？」か仲間決定かよ。」

「例えば航海士とか船医とかだよ。」

無視された。ここまで来れば断れそうにないな。

白ひげの仲間になるまでは面倒見てやるか。

「基本全部出来る。そうじゃねえと1人で旅なんて出来ねえよ。」

「じゃあアルは副船長兼戦闘員兼船医兼航海士兼コック兼船大工兼狙撃手兼音楽家兼操舵手だな！！」

「いや、どれだけ俺に重労働させる気だ。それに俺以外の仲間いら

ねえじゃねえか……。」

「うおっ！？ホントだー!!」

なんなんだ、エースは。

俺にすべてを任せ切りやがって。

俺でも毎日そんなに労働させられたら死ぬぞ。

「じゃあ先ずは音楽家だな!!」

「……はあ。」

ルフィより常識人だと思っていたが……勘違いか？

思考までルフィとそっくりじゃねえか。もうそこまで来れば溜め息しか出ねえよ……。

ホント、天晴れだよ。

「それよりも——って寝てる!？」

やっぱエースは阿呆だ。

会話中に寝る奴がどの世界にいるんだよ。でもこれは絶好の機会だチャンスな。

今なら逃げようと思えば逃げられるし。

……まあ逃げる気はないけど。

それに今逃げたらエースは確実に死ぬな、どこぞの海賊に襲われてまあ適当に上陸する島でも決めるか。

いつまでも狭い小舟に男2人って云うのは嫌だからな。

・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

さて、エースが寝ている間に俺は海図と羅針盤コンパスを見ながら船を進めて島についたわけだが、妙に静かだ。

——ッ！！！！

まさか俺が来たから——ッて自惚れんな、俺。取り敢えずエースを担いで飯屋にでも行くか。なんか寝ながら飯が如何とか云ってたし。美味そうな匂いがすりゃ起きるだろ。

エースは飲食店の前で見事に目を覚まして、涎を垂らし始めた。そう云う事で俺とエースは只今絶賛食事中。

「なあアル！ここで仲間見つけないのか！？」

「ちげえよ。仲間は序でだ。まずは仲間が乗れる船が先だろうが。」

「あ、そうか！流石アルだな！」

「いや、普通だろ。つーか俺の名前を公衆の面前で平気で晒すんじゃないやねえよ。こういう時は大概——。」

「紅い外套にフードの中からちよろちよろ見える金髪。2mほどの身長。お前が“金鷹”のアルか？」

「——ってなるんだよ。」

俺とエースが会話をしているところに1人の男が乱入。

イースト・ブル

東の海でも名の通ってる俺は無謀な賞金首によく狙われる。今みたいなのがいい例だ。

紅い外套が俺のシンボルマークみたいになっているので最近では意味がない様な気がしてきた。

でもそれを着てなかったら声も掛けられずに襲われるからな。ちよろちよろは余計でウザいが。

「エース、少し飯食いながら待ってろ。」

「ん？喧嘩か？さっさと終わらせろよ。」

「ああ。」

飯を喰っている途中だが売られたからには買うものだろう、喧嘩つて云うのは。

まあ店内では迷惑を掛けるので外でやるがな。

「まあこんなところではなんだ。外に出てやろうじゃねえか。」

俺は男の顔も見ずにスタスタと外へ歩いて行き、街外れへと出る。そしてそこで漸くフードを取り、相手の顔を見る。

黒いズボンに白いシャツ、それに腹には緑の腹巻。左腕には深緑のバンダナを巻いて、腰には3本の刀を携えている。

そして珍しい緑色の髪。全てが世界一の大剣豪を目指す男と合致した。

「俺はお前とある男に会う為に海へ出た！！」

「……………何を目指す。」

「最強！」

その男はニヤリと口角を持ち上げて、深緑のバンダナを頭に巻きつける。

「つか俺に逢いたかったんだな……」

「いつぱしの剣士なら剣を交えるまでもなく俺とお前の力の差を見抜けるだろ。俺に刃を突き立てるとはおのれの心力か――」

――はたまた無知なる故か。」

「俺の野望ゆえ。そして親友との約束の為だ。」

バンダナの男は口に柄の白い刀……和道一文字を銜えながら喋っている。

顎力……はんぱねえ。

そう思いながらも俺は地面から刃渡り10cm程の鉄の小刀を錬成する。

「オイ、何のつもりだ、そりゃあ。」

「俺はウサギを狩るのに全力を出す馬鹿な獣とは違う。高々名刀を一本持っている海賊がいたところでここはグランドラインとレッドラインによって4つに区分される最弱の海、イースト・ブルー。生憎これ以上小さい刃物は創れない。」

「人を馬鹿にすんのも大概にしろ……！！！」

バンドナの男はそう云って和道一文字を銜える力を強くする。そして足に力を入れて――

「死んで後悔すんじゃないぞー!!」

俺の方へと駆けだしてくる。

「鬼斬り!!」

そう云って俺を斬りつけようとするが、刀の速度が遅すぎる。

それに交差した手で左右の逃げ道をふさぎ、銜えた刀で上への逃げ道を塞ぐ技だろうが、関係ない。

俺はその3本が1点になる場所を見切りながら、そこに刀を突き付ける。

ガキンッ!!

「なッ……!!!!」

すると見事に全ての刀を受け止めた。

本来ならもう少し遊んであげたいところだが、奈何せん今は人を待たせている。

エースなら別に問題は無いだろうが、それでも人を待たせる事は好きではない。

さっさと終わらせるか。

キンキンキンキンキンッ……!!

俺に向かってくるのは剣戟の嵐。

バンドナの男は額に汗を滲ませながら凶刃を向けてくるが、俺はそ

れを難なく捌いていく。

ドンッ……！！

そして最後には弾いてバンダナの男を地面に転がす。

「くっ……！！うえああああ！！！」

しかしバンダナの男は直ぐに立ち上がって何度も剣戟を繰り返す。
ここらが頃合いか……。

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

俺はバンダナの男を弾いて距離を取って、そこに持っていた鉄の玩具を投げ、小規模な爆発を起こす。

一般人でもダメージも傷も蓄積されない程度のものだ。

「ゲホッゲホッ！！何しやがる！！」

「生憎俺は剣士じゃねえんだ。剣の腕が鷹の目と同格だろうが、それだけで戦うつもりはねえ。てめえが目指すのは俺じゃなく、鷹の目だろう。それなら俺じゃなく、鷹の目を倒せ。じゃあな。」

砂煙が舞って、バンダナの男の視界が塞がれている間に俺は消える様にその場から去り、エースが待つ店に行った。

ただこれ以上やると俺の良心が痛むからでもあるんだが。

「……………はあ。やっぱりか。お代は置いていきます。」

「毎度！！」

飯を喰いながら寝ていたエースを担いでその島を後にした。
こいつは………どんだけ寝れば気が済むんだよ。
先が思いやられる………！！

行き先

「なあ、ここ何処だ？」

「さあな。てめえの記憶に訊きやがれ。」

「……………わからん。」

「……………だろうな。」

最悪だ。勢いに任せて2人で偉大なる航路グランドラインに入っただのはいいがエースの所為で何処が何処だかわかんなくなっちゃった。それに加えて記録指針ログポースを無くしたと来やがった。

それだけ揃えば俺の怒りは天元突破して怒る気にもなれなかった。

——え？時間が飛び過ぎだ？

そんな事は気にすんな。

ちよちよいとリヴァースマウンテン登って俺の持っていたログポースを見ながら船を進めていただけだから。

まあそんな事より今は大事な事がある。それは云わずともわかるだろうが行き先を見失っちゃったことだ。

こうなつた経緯を過去ヘトリップとかでの説明とかは面倒臭いので簡潔に説明したいと思う。

昨日の夜の船番がエースで、俺が寝ている間にあいつも寝てログポースを何処かに無くした。

うん、簡潔。

まあそれで俺たちは現在途方に暮れていると云う訳だ。

「もぐもぐ、あゝ、腹減ったあゝ……！！」

前言撤回。

途方に暮れていたのは俺だけだ。

エースは絶賛食事中の癖にそんな事を云ってやがる。

「つーかもう少し焦ろっぜ。俺のログポース無くしやがって……。」

「まあそうケチケチすんな！あんなものなくたって海賊は出来る！」

「まあそりゃそうだけど航海が出来ないだろ……。」

「じゃあ俺たちを囲んでる海賊船から奪って来いよ。俺は未だ飯食ってるから。」

「いや、そう云う事は船長であるエースがするもんだろ。それに俺はお前より年上の男だぞ。」

「なに！？アルって男だったのか！？」

「今更！？」

「嘘だよ。それより……んぐつと。やるか？」

「ああ。」

訊いてもわかる通り俺たちは海賊船3隻に囲まれている。全て違う

海賊のものだろう。

今の俺たちの船はキャラベルほど大きくは無いが2人が暮らすには十分な大きさで、それにちゃんと海賊旗ジョリー・ロジャーも掲げている。

船室もあって、風呂やキッチンなどのものもあり、家具も揃えている。

だから他の海賊の格好の的と云う訳だな。俺が乗っていると云う事を知らないから。

「エース、お前が1隻相手しろ。俺は2隻沈める。」

「——ってことはあれやるのか!？」

「あれって?」

「あの炎が『ドンドカンバコーンズガン!』ってなるやつ。」

「ああ。動くのが面倒だからな。それに炎ならお前も使えるだろうが。」

エースが云っているのは焰の錬金術の事。

今のところエースには焰の錬金術と他諸々の錬金術を見せてある。紅蓮の錬金術と7つの大罪については見せていない。

眼の刺青の事は訊かれたが、それ自体は能力と関係ないので意味だけを教えておいた。

そんなこんなでエースは敵船の方に跳んで行つた。

俺はと云うと座ったまま動く気がない。

だって動かないで勝てるんだから仕方なくない?

「——全てを焼き尽くす業火炎」
フレイズ・バーン・アウト

発火布の手袋をつけて、指パッチンをして火花を起こし、その火花を業火に変える。

その業火は数十秒で海賊船2隻を焼き払い、海に沈める。
今のが最大出力ではないが、普通の人間が直接喰らったら恐らく死ぬ。

しかし俺が狙ったのは船。海賊の中で何人が生きている奴はいるだろう。流石にこれ以上俺も向こうもやる気はないだろうが。
これ使えば海軍の追手を追い払えるな。

——あ、でも距離に制限があるから大将連中相手が乗る船だったら意味無いか……シヨックだ。

そう云えばログポース奪うの忘れてた。

でもまあエースの方が何とかしてくれるだろう。

……いや、あいつがそんなこと憶えてるわけねえな……一応行ってみるか。

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

・

「エース、これはなんだ？」

「そりゃあ……ログポースとか云う奴の残骸だ。」

「……はあ。じゃあ如何してこうなったかの経緯を説明してくれ。」

エースは海賊を見事に全滅させていた。それは称賛に値する。
しかしログポースを壊すのは頂けない。まあ目的を忘れていた俺も
言える立場ではないが。

それでも俺の場合2隻相手だったからと云う理由を付けられる。

……まあそれもいいわけにはならないか。

「俺がこいつらを倒していたら、このログポースを持った奴が襲つて来て、反射的に蹴っちまった。それで壊れた。仕方ないだろ？」

「まあそれなら仕方な——くねえよ！俺は早く陸に上がりてえんだ。この船の中に未だないか探すぞ。」

エースに叱咤しても仕方のないことなので俺とエースは他にログポースがないか探す事に。永久指針エターナルポースでもいいけどログポースの方がいいな。

俺が拾った事のあるエターナルポースはバルディゴ行きのものだけだし。しかもそれを未だ持つてるからな、18つ程。

そんなことは置いておいて、俺は探してみたが見つからなかった。後はエースに頼るしかないな。

「おいアル！少し違うけどあつたぞー！」

エースは走りながらこっちに向かってくる。

その手にはログポースでは無くエターナルポースが握られている。

ああ、なんかすごい嫌な予感がする。

これでまたバルディゴだったら俺は死ぬぞ。

「ほら、見る！」

エースは『俺やりましたよ』的な感じで騒いでいるが無視。
取り敢えず行き先を確認。

—— クライガナ島 ——

ある意味最悪だな。

クライガナツて云つたら4年前まで戦争があつたところだろう。確
か潰れた国の名前はシッケアル王国か。如何にも湿度高そうな名
前だよな。

確かそこには鷹の目がいるんだよな。久し振りに会ってみるのも悪
くは無いけどあそこのヒヒみたいな怪物はウザいんだよな。
でもゾロの事伝えとくのはいいかもな。『久しく見ぬ強き者がいた』
って。

「さつさと行こうぜ！！そのクライガナ島ってどこに！」

何も知らないやつはいいよな。俺はあの湿気がありそうな国の名前
を訊いただけで嫌になるってのに。

クライガナ島って云う名前だけでも俺は十分嫌だけどな。

「ああ。まあ行くか。」

行ってから鷹の目にでもログポースを貰えばいいだろう。鷹の目な
らログポースとかいっぱい持ってそうだし、色々なエターナルポー
スも持ってるだろうし。

そう云う事で行きましょうか。

「それじゃあクライガナに向けてしゅっぱーッッ!」

エースの声と共に俺たちの船は進んでいく……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1730n/>

ONE PIECE 錬金術と7つの大罪

2010年12月12日13時20分発行